

全国同人雑誌最優秀賞

第17回 まほろば賞 発表

二〇二一年からまほろば賞は全国同人雑誌協会と文芸思潮が主催することになりました。今後もこの形で進めさせていただきますので、どうぞよろしく願います。

第一七回新全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇二三年七月九日にハドル・スペース自由が丘において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が深く批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。

一昨年から、「まほろば賞」は受賞作品には、賞状と賞金三十万円（賞金は主に寄付によるものです。また二人同時受賞の場合は、恐れ入りますが、一人二十万円とさせていただきます）および記念トロフィーを贈らせていただく

ことになりました。河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円および記念品を贈らせていただきます。優秀賞にも記念品と賞金五万円を贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人協会・全国同人雑誌振興会及び文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいっそう多数の方が御参加くださるようお願いいたします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの手でこの賞を盛り上げ、育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切に願います。次第です。

またこの結果及び選評とその感想・批評の動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

第17回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「エリザベトを選んで」

〔白鴉〕33号

蒔田あお

特別賞

「浜辺のリズ」

〔黄色い潜水艦〕75号

藤本あずさ

河林満賞

「青山墓地の桜」

〔槇〕45号

萩原紫香

五十嵐勉賞

「血の湯」

〔繫〕3号

寺本親平

読者賞

「見返り」

〔季刊作家〕100号

佐藤文平

「枯野」

〔季刊作家〕100号

祖父江次郎

優秀賞

「白詰草」

〔季刊午前〕60号 西田宣子

まほろば賞賞金は、木内是壽氏、故蘭藍子氏、三田村博史氏、故原石寛氏、夏目日美子氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏、「北斗」などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「べん」「海」「文芸中部」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。

選評



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」
「空海」「親鸞」など
最近の本「遠き春の日々」
「少年空海アインシュタイン時
空を超える」「天海」「善鸞」
日本文藝家協会副理事長
武蔵野大学名誉教授

同人雑誌の充実ぶり

三田誠広

どの候補作も文章が安定していて作品としてのレベルが高く、昨今の同人誌の充実ぶりを実感できた。掲載順に感想を書く。「白詰草」（西田宣子）は二組の高齢者夫婦の日常を丹念に描いた佳品で、手並みが鮮やかで過不足がない。片方の妻と他方の夫が絵画を描く点で接点があるのだが、芸術小説という感じではなく、淡々とした日常が描かれる。画家の妻が病気になるったり、孫の結婚の話が出てくる場面もあるのだが、それもありふれた日常風景にすぎない。小説としての盛り上がりには欠けるのだが、こういう

小説があってもいいと感じさせる。

候補作の中で異色と感じられたのは「血の湯」（寺本親平）で、平家琵琶や説教節を思わせる幻想の世界に読む者をいざなう不思議な作品だ。ストーリーのない散文詩的な展開で、独特の語り口で恐ろしいことが語られる。その文体の強度には驚かされるし、ユニークであるということは評価されなければならない。ただユニークすぎて理解が及ばないところがあることも確かだ。五十嵐勉さんの強い推奨があったが、他の選考委員の賛同は得られなかったし、よく自身も強くは推せなかった。語り手が抱えている業のようなものももっと描かれていればと惜しまれる。

次の二作は同じ同人誌の掲載作で、妻のいない高齢者男性が二人ずつ出てくるという点でも共通している。ほくも今年、後期高齢者になった。まだ妻は健在だが、もし一人きりになったらこういう状態になるのだろうか、身につまされる思いで読み進んだ。女性の方が長生きするので、男性の高齢者が一人取り残されるというのは少数派だろうが、それだけに悲惨さが際立つように思われる。二作とも男性高齢者の一人暮らしのわびしさが細部に渡って描き出されていて、逃れがたいリアリティーをもって読者に迫っていく。「見返り」（佐藤文平）はテンポよくプロットが展開する秀作で、書き手の技術力の確かさが感じられる。最後に到って主人公の妻の過去が明かされるという仕掛け

があつて、そこが読みどころでもあるのだが、やや通俗的なオチになってしまった。「枯野」（祖父江次郎）は野良猫を飼う話や、競輪場の寂しい風景なども描かれるのだが、プロットというほどのものではなく、老人二人の哀れな末路が淡々と描かれる。救いのない独居老人のありのままの現実がつきつけられて息が詰まるようだ。けっして楽しい作品ではないが、これが純文学だと思わせる訴求力がある。

河林満賞を受けた「青山墓地の桜」（萩原紫香）は終戦直後の米兵の現地妻と、近所の少女の交流を描いたもので、おそらくその少女は書き手自身と重なるのだろう。世間から白眼視される立場の現地妻の女性も、英語ができるくらいだから育ちのよい人なのだろう。終戦直後の就職難の時代には、女性の仕事も限られていて、教養がありながら米兵相手のホステスや現地妻になる女性も少なくなかったはずだ。大人たちからは批判の対象となる現地妻の女性も、偏見のない少女の目には素敵なお姉さんと感じられる。そんなありのままの姿を少女の視点で素直に描いてみせた書き手の筆致に好感がもてる。それだけにそのお姉さんが胎児を宿したまま自殺を遂げる結末には痛切なものがある。受賞に相応しい見事な作品だ。終戦直後の東京の民家のようすが細部にわたってきつちりと描かれていて、歴史的な証言という点でも高く評価できる作品だ。

特別賞となった「浜辺のリズ」（藤本あずさ）は短い作

品で、一読しただけでは印象のうすいエッセーふうの作品と感じられたのだが、丹念に読み返すと細部が輝き始める。津波で飼い主を失った犬を保護して、老人を癒すセラピー犬としての訓練を受けさせるという導入部は、ただの犬の話ではないかと危惧されるのだが、やがて筋萎縮性側索硬化症という重病を負った女性と、犬を通じて交流するという展開になって、読者は改めてこの作品の重さに気づくことになる。言葉を活けない重病人と、物言わぬ犬との間に不思議な魂の交流のようなものが芽生えていく。そこまで読み進むと、この犬が津波という地獄を体験した生命であり、一方で身動きできないという業苦を負った患者がいて、そこに言葉を越えた何かが通じ合っていくということの不思議さが見えてくる。軽いエッセーと見えた短篇に、驚くほどの重いテーマが秘められている。

まほろば賞に輝いた「エリザベトを選んで」（蒔田あお）は冒頭の食肉加工の作業場で働くヒロインの姿がまず印象的だった。このようなオーブンニングの小説は珍しいのではない。やがてこの女性の不幸な生い立ちが語られて、なぜ彼女が食肉加工に従事するようになったかが明らかにされる。ふつうの女性らしい幸福には目もくれずに地味に生きようとする彼女の生き方に共感できるし、読者のほくは傍観者にすぎないのだが、頑張つて生き抜いてほしいと思わずにはいられない。だが作者はこの女性をさらに不幸な

境遇に導いていく。プロットの一つ一つがリアルに描写されているので説得力があり、読者はこの女性に寄り添って不幸な境遇を追体験していくことになる。最後にわずかな救いとして、宗教的なテーマが立ち現れるのだが、下手に描くと理屈っぽく感じられる聖書の引用が、関西弁のいきいきとした会話とともに提出されるため、読者の胸に素直に入り込んできて、深い感動をもたらす。この作品に出会えてよかったと思わずにはいられない。



こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マ
ネージャーを務めるかたわら
文学修行
88「風の河」で文学界新人賞
を受賞
他の作品に「消える島」「後
生橋」「光の群れ」「火の闇」
などがある

圧倒する力量と迫力

小浜清志

受賞作となった「エリザベトを選んで」・蒔田あおの作品は他を圧倒する力量と迫力で全員一致で受賞作となった。主人公土屋珠季と来栖陽平のかんりの年齢差結婚からこの

作品は始まり、徐々にある方向へと崩れていくのであるが、その方法と表現には巧みな工夫が加えられており、自然と作品の世界へ引きずり込まれていく。

珠季が高校三年の七月に母と弟が無理心中するという事件が起きた。このことを機に珠季は罪を背負ったような生き方を選ぶ。食品会社の肉をスライスする女性労働者として暮らしている珠季は、同じような過去を持つ陽平と付き合い結婚式を挙げるのだが、式場の教会が重要な伏線となつてこの作品の重厚さにつながっていくのは見事である。十九才も年上である妻と夫の不釣り合いは陽平が会社をくびになってから露見する。出産から五ヶ月のある日陽平は得意先のスーパーの売り場マネージャーを殴る事件を起し、会社を解雇され三日三晩布団の中でふさぎこみそのあとふらりと家を出て一週間行方をくらませる。そこから崩壊が速度を増し珠季の病氣と相まって読むのも辛くなる展開がくり広げられる。陽平は父親という意識があまりなく珠季にもたれかかっているが、当の珠季はがんを宣告され生きる望みすら奪われようとするが、結婚式を挙げたときの教会の牧師との再会で宗教に頼っていくことで希望を見出すという結末になっている。年の差婚から不条理は広がり、坂を転げ落ちるような生活からキリスト教に救いを求めるという構図は少しあざといとは思ったけれども文章の力でここまで作りあげたのは見事である。

次に私が感銘を受けた作品は「白詰草」西田宣子である。主人公の果林は現在七十五歳で三十五才の時から毎年県展に絵を応募しつづけている。絵の対象はバラや百合ではなく地味な草や花しか興味がわかない。そして、彼女の交友関係も地味である。知り合ってから四十年になる喫茶店「夢」の店主の須美は五十代で重一さんというパートナーを得て今でも現役で店をきりもりしているが、果林の娘の千夜にいずれは店をゆずるつもりでいる。重一さんは全国的にかなり有名な画家であるが果林は絵のアドバイスを一度も受けようとせず、毎年の応募作にはシロツメクサをしきつめた「白花」というタイトルであるが、その絵の中に三人の女を描こうとしている。大切な者たちを守り、着実に人生の時を過ごす草のような女の姿を果林は描きたいと思っている。十二月の半ばになって須美が倒れたという連絡を重一さんから受ける。もう八十才になる須美であるから果林は夫と共に病院にかけつける。入院のゴタゴタの中で果林は老いをより身近かに感じ、夫とも初めて納骨の事など話し合う。最後は孫である可奈の結婚相手に二人の親が反対をしているとの相談を受ける。ともかく相手の青年と会ってみることにして「夢」で会う日時を決めるところで終わる。この作品の良さはまず誠実である。どこを見てどこに気を配ればいいのかをきちんとわきまえていて清々しい。

「見返り」佐藤文平も丁寧な筆致に好感が持てた。同期入所の三国民雄から思いがけない便りを受け取る。個人的な付き合いがあった訳でもなく、せいぜい年一回のOB会で顔を合わせるほどの関係ではないが、上京する用があるので貴兄の都合のいい日に亡くなった奥さんに線香をあげに行きたいとのこと。桜井は亡き妻の遺影に手を合わせ手紙の内容を伝えると、なつかしいお名前ね、でも私たちを引き合わせた恩人にはちがいないから歓待してあげてねとささやかれた気がした。入所して十四、五年経験を積むと係長への昇進の話が出るが、三国は親が政治家ということとで一番のりを果たしたと上司から知らされた矢先に二人で日帰りの出張に行くことになる。その帰り道三国の運転中に自損事故を起こしてしまう。すると三国は土下座までして桜井、お前がやったことにしてくれと懇願する。係長内定を取り下げられるかもしれない三国の頼みを桜井はしぶしぶ受け入れてしまう。「その代わり、見返りは必ずきちんとさせてもらうから」と彼は言った。三国のその言葉はあてにしていなかったが、数ヶ月経って三国から手紙が届いた。それによると庶務課の細川菊恵さんから手紙でも打ち明けられたことだが、彼女は桜井との交際を希望しているとのこと。さり気なく映画にでも誘えばと答えたが、このことは彼女には内緒にしてくださいとのこと。手紙の通り映画の誘いを受ける。そして、二人の仲が深まり互いに

なくてはならない存在になる。そして三国から二通目の手紙が届いた。それによると細川菊恵から感謝の言葉があったとのこと、月下氷人のまねごとみたいなものですが、これで何とか収めてもらったら助かります、と綴られていた。見返りとはそういうことだったのかと納得する。やがて二人は結婚し子供もできたが、妻はガンで先立つ。そして、三国との再会になるが、出張帰りの事故も菊恵を紹介したのも全て三国の思いつきだったとのタネ明かしで終わる。それだけではなく、もう一工夫できなかったか残念である。「枯野」祖父江次郎も老年を描いている。武雄は妻の一周忌をすませてから猫の鳴き声を聞くようになった。玄関横のガラス戸に寂しげに猫の姿が映る。扉を開けると部屋をのぞいている。中に入れてアジの煮付けを出した。その日を境に猫は自由に出入りをするようになる描写を加えながら、老いた男の一人暮らしを淡々と描いていく。それはまさしく枯れた日々が続く枯野になるように見えてくる。スーパーへ出かけいつもの椅子で世間を眺める老人の目にも輝きはしない。だが、小堺という中学の同級生と再会してから枯野に陽差しがあたるように武雄の生活も彩りを帯びてくるが、所詮は老人同志の行動であり会話である。競輪場の出入りをするようになってから武雄と小堺の間にかつてあった溝がなくなり孤独感もうすらいでいくが、小堺の死で枯野がふたたび広がっていく淋しさが襲ってきた。

「青山墓地の桜」萩原紫香は記憶に残る作品であった。戦後にはアメリカ兵と関係をもつ女性があちこちにいた。その一人である女性と知り合った私は毎日のように遊びに行っていたが、ある日汚い言葉を浴びせしめよう。幼いがゆえの配慮を欠いた言葉の後悔は時を経て消えることなくまといつく。それから間もなくして彼女の飼っていた犬がわが家に来た。祖母が言うにはお姉さんは遠くへ行つたとの事。「私」はアメリカへ行つたものだと思ひ込んでいたが、その犬が死んだときに母から真相を知らされ、自分の吐いた言葉がどれほどお姉さんを傷つけたか後悔に苛まれる。お姉さんの自死は想像するだけで淋しい。

「浜辺のリズ」藤本あずさは、透明感のある作品である。東日本大震災の被災犬であるリズと、ALSという難病をわずらっている真由美さんと、飼われているハッピーという犬との交流を描いているが、暗い方へ流れるのではなく、むしろさわやかな展開が心地よく、作者の手柄がかい間見える気がする。

「血の湯」寺本親平は、透徹した観念の膨らみには脱帽するしかない。



いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
早稲田大学文学部文芸科卒
79「流瀆の島」群像新人長編小説賞
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著「緑の手紙」(読売新聞・NTT プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞)・「鉄の光」「ノンちゃん、NONGCHAN」(聖丘寺院へ)「破壊者たち」

芥川賞を凌駕する充実感

五十嵐勉

第一七回まほろば賞も中身の濃い作品が揃った。全国の同人雑誌から上がってくる優秀作品の読みごたえは、最近の芥川賞作品よりもはるかに充実感があり、凌駕する内質を有している。商業文芸誌の質的凋落と、文芸出版体制の衰微を、現状としてこれらの作品の前に感じるとき、文芸創作をどのように再構築していくべきか、考え直すにはいられない。世の中にはもっと掘り出して広めるべき作品があり、共有すべき高いレベルの文学作品があることをあらためて感じた。

受賞作の蒔田あお氏の「エリザベトを選んで」は、特に重厚な作品で、運命の果てに痛に冒される緊迫感、圧倒

的な迫力を備えている。少女期、障害を抱えた息子を連れて自殺し、自分を身寄りのない者として置いていった母の追いつめられた状況が、その時点で主人公の運命を決めたと同時に、のち自分もその同じ状況に陥っていくところに、この筆者の鋭く深い構想力が示され、文学造形の非凡な掘削力を感じる。普通は少女期と結婚期、子育て期とをこのようには重ねない。しかし蒔田氏は、運命の苛烈さを描く手を緩めることなく、限界まで追い詰めていく。この

烈しい収斂性は、生粋の文学者魂を示して、煌めいている。主人公が末期の膀胱癌で死ななければならぬその緊迫性の中に、教会で主人公を導く牧師も同じ末期癌で、この世界から消えていく運命の一つの同期性のうちに、救いを強くするが、そこにしか希望がない、この希求の強さに、作品の眩しい発光がある。時間が少し飛ぶ結節部分にいくらかギクシャクした流れの淀みも感じられるが、いずれこの筆者は逆にそれを長篇の新しい手法として生かしていくような、大きな可能性が感じられる。期待できる作家だ。

特別賞の藤本あずさ氏の「浜辺のリズ」は、寝たきりの重度の障害者を、犬の世話を通じて訪問ヘルプするストーリーだが、すでに言葉が喋れず、キーボードでの画面表示によって意思を疎通させるだけのコミュニケーションの新しさも新鮮で、それによって逆に内面や本音が露出する側面もあり、その斬新さは確かにある。しかしその奥深

いところは、結局肉薄でさず、むしろ犬によってある生物
的な共感を響かせ合うに留まっている。救われているの
は、津波で飼い主や家を失い、浜辺を彷徨っている犬の姿
が、身体を失って生き物としての最低の生存のなかでの障
害者の孤独感に重なってくるところだが、これは筆者の底
にある優しさによってしつかりした基盤を得た、一種の迂
回による成功となっている。そこに幸運な結節がある。し
かし作者が今後どこまでこの世界を追求していけるかは、
未知数である。

作品に漲る感情の一貫性では、萩原紫香氏の「青山墓地
の桜」に深い痛切さを覚えた。戦後間もなくアメリカ軍
の駐留部隊の米兵と親しくなったうら若い女性の悲劇に、
まだ分別のつかない子供の立場から接したことによって、
いっそう犠牲になった一人の女性の姿が鮮やかに浮かび上
がってくる。当時アメリカ軍の駐留した場所がよく聞かれ
た話、よくあったことでありながら、ここまで鮮やかに人
間として浮かび上がらせた物語には初めて接した気がし
た。これを読むといつまでもその女性の姿と、戦後の情景
が胸深く残るだろう。その意味で、意義深い文学作品となっ
たことに、拍手を惜しまない。

寺本親平氏の「血の湯」は、近年例を見ない超リアルズ
ムの異界譚である。普通の描写を一切捨てて、超現実の世
界に直接入っていく切り込みは、呪術・祈祷の領域まで踏

「枯野」は、一人暮らしのわびしい老年を、猫などと慰め
合い励まし合いながら生きる姿を描いている。まさに「枯
野」の風景に重ねて叙述するその「さび」が、味わい深い。
以前は羽振りがよかつた同級生が、今は凋落して競輪に狂
い、やがてさらに追い詰められて自殺するという後半のス
トーリーが人生の終わりのわびしさを荒涼とした風景とし
て、被せてくる。それはだれもがそこへ行く普遍的な道筋
として、「枯野」を広がらせてくるところに、長い積み重
ねと忍耐の技量を覚えた。

西田宣子氏の「白詰草」も、画家として創作を続けてき
た主人公が、老年という生を終える状況に近づいて、一つ
の軌跡の意味を問いかける小説である。この年になって初
めて見えてくる風景が確かにある。それは老年のたわわな
果実として、あらためて生を問う機会に恵まれる。その問
いの前にどう答え、どう姿勢を整えるか、長い人生の終焉
に臨んで、文学だけが持つ問いの深まりが、この作品には
ある。他の身近な人々の人生模様を重ねてそれがさらに
迫ってくる鮮やかさが、この作品の美点であろう。

同人雑誌には優れた作品がある。これらをどうたくさん
の読者に普遍化するか。文芸作品の表現手段や出版による
流通は、現在大きな岐路に差し掛かっている。優れた作品
をどのようにすれば、多くの読者が手に取り、味わえるよ
うにすることができるか——この課題をあらためて、七篇

み込む根源的な世界を浮かび上がらせている。我々の血の
中に潜む、修羅や奇形や悲劇の深い流動の深淵を見せてく
れる。生き物としての血の渦の根源を覗かせる描写は、日
常の幕を暴いて、血の業としての合流を生命帰還の還流の
姿で、宇宙の中に再生させていく。こういう世界が造形で
きるのは、何よりも筆者が薩摩琵琶奏者であり、平家物語
に息づく戦乱の血の怨みを体感しているからだだろう。泉鏡
花の系譜とも言えるこれは、筆者でなければ書けない世界
であり、現代こういうものが忘れ去られていく時代趨勢の
中では、特に貴重としなければならない緊要性から、「五十
嵐勲賞」を贈った。

読者賞の佐藤文平氏「見返り」と、同じく祖父江次郎氏
「枯野」は、どちらも晩年の世界を鮮やかに描いて、人生
の終わりに見えてくる生の風景を呈示している。

「見返り」は、妻が死んでの数十年ぶりに訪ねてきた同
僚の告白を聞くという設定だが、その告白の内容が実は妻
がその同僚の前の恋人で、政治的欲得でその彼女を捨て
て、主人公に乗り換えることを勧めて縁を持たせたという
ショックな内容である。これは同僚も末期癌で命は長
くないことを前提にした、一生を振り返る告白であるだけ
に、起こり得る人生最後の秘密の暴きでもある。老練で緊
密な筆致は、晩年の衝撃的な告白を普遍的な生の振り返り
に止揚している。読ませる文章には、高い技術を感じた。

の作品が突き付けてきていることを、感じさせる今回の選
考だった。



なかがみ のり
1971 東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99「イラワジの赤い花 ミャンマ
ーの旅」(集英社)を上梓
同年「彼女のブレンカ」(集英社)
ですばる文学賞受賞
「悪霊」(毎日新聞社)「いつか物語に
なるまで」(晶文社)「夢の船旅—父中
上健次と熊野—」(河出書房新社)「ア
ジア熱」(大田出版)「シャーマンが歌
う夜」(水の宴)(集英社)「海の宮」
(新潮社)「熊野物語」(平凡社)「天
狗の回路」(筑摩書房)など著作多数

痛みと共に生きるつづひと

中上 紀

第一七回まほろば賞の候補作品は、いつもより多く七作
品であった。選考会では、掲載順に一作一作選考委員が各
自意見を述べていったが、熱く語り合ったその時同様に、
掲載順に評を記すことにする。

西田宣子氏の「白詰草」では、包みこむような文章が、
高齢と言われる年齢に差し掛かる主人公、そして家族や友
人、周りの人々の人間模様を、絵画に描かれる花になぞら
える。花はバラやユリのように華やかでも色鮮やかでもな

く、「田の畔や道端や河川敷などの地味な花」だ。主人公はそれをへそ曲がりだと言うが、清々しいほどに立派なそのこだわりは、本作を貫く一本の軸となっている。どこにもあるような場所でひっそりと咲くシロツメクサを描く姿に、この人生はなんてことのない、どこにでもある人生なのだということが、だからこそ尊いのだということが、堂々と示される。絵の中に詰め込まれた他の登場人物たちの生き方も見逃せない。友人・須美の夫である重一は、アマチュアの彼女とは異なり、プロの画家としては華々しい人生を送ってきた。でも彼にも、屋久島の巨大杉のように描ききれないものがある。「描けるだけ誠実に書けばいい。書けるだけ誠実に書けばいい」という言葉が、小説の書き手である著者自身へのエールのように残る。

五十嵐勉賞を受賞した寺本親平氏の「血の湯」には、圧倒的な「語り」の力を感じた。読み手の心の奥底の繊細な部分に、語りかけてくるような作品だ。奇形で生まれて亡くなった子らの後を追うように死んだ妻を、男はどこまでも追っていく。さながら、日本神話で、イザナギが、蛭子神を産み火神を産んで亡くなった妻のイザナミを、黄泉の国まで追っていったように。琵琶の音色に誘われて、男はどんどん深みへと進んでいく。宿を訪れ、湯に漬かり、地底湖に吸い込まれ、岩屋へとたどり着く。それらのすべては血に塗れており、男はそこで悲惨な自身の過去と対峙

なった。そこで主人公は裕福だった小堺の破滅を目の当たりにしていく。武雄が味わっている日々の味気なさや孤独は他者とのかわりを避けて生きてきた自分自身が選び取ったものだが、だからこそ生々しく突きつけられ、人生とは、高齢になることとは、どういふことなのか改めて考えさせられる作品だった。

今回の候補作には、ベツトを飼っている主人公が多かったが、この奇妙な共通点は、何かを意味しているのだろうか。河林満賞を受賞した萩原紫香氏の「青山墓地の桜」にも、ハナという犬が登場する。本作では、洗練された都会といったイメージの今の様子からは考えもつかない、戦後の麻布界隈の姿が、幼い女の子の視点でヴィヴィッドに描かれる。それはひと言で言えば、進駐軍の兵隊たちの姿であり、生きるために彼らを頼らざるを得なかった、女性たちの姿だ。女の子は、ハナの犬友達のペスの飼い主である「お姉さん」と親しくなるが、彼女もそんな女性たちの一人。最後に待ち受ける、絶望による悲劇はショッキングであるが、当時は珍しい話ではなかったのかもしれない。「あの人も戦死したのと同じことだよ」という、女の子の祖母の言葉が突き刺さる。戦争によって一番苦しんだのは、女性や子どもなどの弱者たちだ。そのか細い声を救い上げ、物語として伝えていくことは、小説の大切な役割である。

犬が出てくるもう一つの作品は、藤本あずさ氏の「浜辺

する。やがてその血は龍に姿を変えて天へと上っていく。あの世ともこの世ともつかない世界が、おどろおどろしくも幻想的に描かれた作品だった。これでもかというほど「血」が出てくるが、決して血なまぐさはない。琵琶の音の余韻が美しい。

「高齢者」の主人公が昔を振り返る、あるいは妻が亡くなる、というパターンが、今回の候補作には多かった。高齢になるということは、あの世への扉がぼんやりとでも見えてきているということだ。故に、主人公たちは過去を振り返り、避けてきた痛みと対峙したり、愛した人との別れを思い出したりするのもかもしれない。佐藤文平氏の「見返り」で桜井が受け取った葉書に記された旧友三國からのメッセージは、まるで過去からの呼び声のようだ。妻子に愛想をつかされ、天涯孤独となった三國は、衝撃的な秘密を桜井に告げる。一方で桜井の妻菊江は、秘密を墓場まで持っていた。過去への向き合い方としては、どちらが潔いのだろう。深く考えさせられる小説だ。

祖父江次郎氏の「枯野」の武雄も、妻を亡くした高齢者だ。娘もとうに家を出、古い家屋で住み着いた迷い猫の世話をしながら細々と年金で暮らしている。することもなく、近くのスーパーに出かけて長居し、半額の弁当を買う毎日だが、ある日かつて自分をいじめていた裕福な同級生小堺と再会し、酒を飲んだり競馬へ行ったりするように

のリス」だ。主人公はセラピー犬のリスと共に、ALSという難病を持つ真由美さんの家にボランティアに行くようになるが、目しか動かすことの出来ない真由美さんの生命力が強く胸を打つ。真由美さんは「へちまのうりよく」で自身の犬であるハッピーと話が出来る、リスとも「うみで」話したと言う。不思議なのは、真由美さんは、これらのことをベッドに備え付けのパソコンの画面に、目の動きでひらがなだけを打ち込んで表した。小説にも、その言葉通りの文字しか、記されていない。なのに、その限られた文字の間から、真由美さんの声がこぼれ出てくるような気がする。それが感動となつて押し寄せてくる。リスは、震災で飼い主を亡くした犬で、ショックでひどい状態だったのを主人公が引き取った。人間が受けたのと同じ恐怖や悲しみを、あの震災で動物たちも受けた。だから、皆で一緒に幸せになろう、なすべきだ。そのようなメッセージも併せて伝わる、特別賞受賞作品である。

最後に、まほろば賞を受賞したのは蒔田あお氏の「エリザベトを選んで」である。本作には、宗教と、たくさんの過去を抱えた女性、周りの人々の生き方が、二章に分けて重層的に描かれ、考えさせられる。第一章では、母と弟を心中で失い、高校卒業後精肉工場で働く主人公の珠季は、年下の相手と結婚するにあたり牧師から〈結婚講座〉を受けるが、聖書の言葉を学ぶたびに、過去の出来事が映像の

ように立ち現れる。言葉の一つ一つを噛みしめ、深く考える彼女の様子に、読み手も自身の過去を振り返りたくなる。第二章では、子を産んだ珠季が不治の病にかかる。若すぎる故の未熟さか、父親になり切れない夫は我が子を虐待してしまう。宗教を扱っているけれども、壮大な何かというよりは、ただ叫び出したいほどの痛みから解放されるために頼る場所としてそこに在る。彼女を心配し、就職を世話した高校の先生のように。やるせなさや痛々しさ、それでも生きるということの、強さと弱さが伝わってくる、受賞にふさわしい作品だ。

読めば読むほど愛着が湧く力作ばかりであった。



第17回まほろば賞選考会風景 2023.7.9 自由が丘「ハドル・スペース」にて

まほろば賞

「エリザベトを選んで」

(「白鴉」33号)



蒔田あお



蒔田あお

まきた あお

1973 大阪府吹田市生まれ
滋賀県大津市在住
2000 年京都市立芸術大学大学院修了後、高校中学校などで美術科の講師として教鞭を執る
大阪文学学校で小説の作法を習い、2010 頃から小説を書き始める
現在、同人誌『白鴉』会員 同人仲間と切磋琢磨しながら執筆活動中

まほろば賞 受賞の言葉 蒔田あお

小説を書くこうと思いついたときからずっと長編志向でした。自分が書くならば、人の一生にどっぷり浸かるような読書体験をしてもらいたいです。白鴉の同人の皆さんは、そんな面倒くさい私の志向にも付き合ってくださる批評精神の高い人たちです。

しかし、最近の時短の風潮——配信に合わせたイントロの短い楽曲や、映画・ドラマの倍速視聴——に心が折れかけていました。同人誌を作っても短編の方が感想をもらいやすく、考えを改めなければと思っていたところの〈まほろば賞〉受賞の連絡でした。ありがとうございます。まだ好きなように書いていいと言ってもらえたような気がしました。



特別賞 受賞の言葉 藤本あずさ

「まほろば賞」特別賞ありがとうございます。大変うれしく光栄に存じます。十年近く前だと思いますが、こちらの銀華文学賞に応募し、最終選考に残ったという知らせを受けたことがあります。その時は受賞には至らなかったのですが、その頃からは上達したのかな、と思うと感慨深いものがあります。小説を本格的に書き始めたのはカルチャー教室でした。その後大阪文学学校に二年間お世話になりました。最初の教室で指導いただいた故眉村卓先生はお辞めになる前に「あなたは書けば書くほど上手くなる。これからも好きにやうにお書きなさい」とおっしゃいました。その言葉を胸にこれからも書き続けてまいりたいと思っています。

まほろば賞 特別賞

「浜辺のリズ」 (『黄色い潜水艦』75号)

藤本あずさ



藤本あずさ

ふじもと あずさ
1962 横浜生まれ
聖心女子大学外国語外国文学科卒
「黄色い潜水艦」同人
2019 「ガネーシャの娘」で新潮
新人賞最終選考
2023 春 上智大学グリーンフェア
課程入学



黄色い潜水艦 75



編集 藤本あずさ
発行 藤本あずさ
編集 藤本あずさ
発行 藤本あずさ
編集 藤本あずさ
発行 藤本あずさ
編集 藤本あずさ
発行 藤本あずさ
編集 藤本あずさ
発行 藤本あずさ

YELLOW SUBMARINE

まほろば賞

河林満賞

「青山墓地の桜」 (『楨』45号)



河林満賞 受賞の言葉 萩原紫香

萩原紫香



萩原紫香
はぎわら しこう
1946 東京生まれ
頌栄女子学院高等科卒
専業主婦
ブログに小説を書いていま
しがYahoo!のブログが廃
止になり、昨年より千葉県
の「楨の会」同人会所属

この度は、河林満賞を頂き大変光栄に存じます。審査員の先生方に心より御礼申し上げます。特に河林満先生の「渇水」が映画化され注目を浴びている年に受賞出来たことを感謝でいっぱいです。拝読させて頂き三十年も経つ作品とおうかがいしましたが、古さを感じさせるどころか正に現代の貧困が生み出すストーリーで、リアルティに富み、重く心に残る作品だと感銘いたしました。

今回の私の作品は、どうしても書き残さなければいけないとの想いで書きました。ストーリーはフィクションですが、背景は実話です。戦後七十年以上経ち、あの当時を知っている人は年々少なくなり、私の記憶も曖昧なものになりました。ですが麻布には考えられないような環境があったことを、そして時代に翻弄されて、堕ちていくしか道がなかった彼女たちの明るさの根底にあった悲しみや虚無感を描いてみたかったです。

私は今までに創作を学ぶ機会もなく、自己流で書いてきました。そしてご縁があり「楨の会」に入会させて頂き、乾会長さんをはじめ皆さんに学ばせて頂いております。これからも心に残るような作品を書けるように精進していきたいと思っています。

文学同人誌

楨

第45号



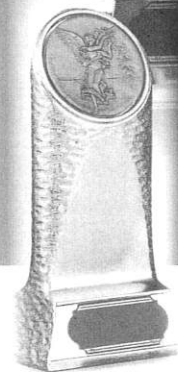
文学グループ・楨の会

まほろば賞

五十嵐勉賞

「血の湯」

（「繫」3号）



寺本親平



寺本親平

てらもと しんぺい

- 1943 金沢市生まれ
- 62 金沢桜丘高校卒業
- 74 文芸誌「渤海」同人
- 92 「遠州豆本の会」会員
- 2005 「卯辰」文学界上半期同人雑誌優秀作
- 同年 第33回泉鏡花記念金沢市民文学賞授賞
- 07 琵琶演奏者として「奏拳の会」を主宰 後進の指導に取り組み現在に至る
- 22 文芸誌「繫」（富山）同人

五十嵐勉賞

受賞の言葉

寺本親平

奇しくも平成二十三年に「幻燈一夜」という作品で同賞をいただいております、今回で二度目の受賞となりました。五十嵐編集長に前回の受賞作を評価されて以来、「あなたにはとんでもないものを書いてもらいたい」と励ましの言葉をいただけてきました。小生は、人間とそ生活を書くのが至って苦手で、夢想的な作品へ傾きがちでしたが、小説を書くと言う行為は精神と肉体の土方作業だと思っています。しかしそのためには徹底した集中力と技術が必要なのは自明のことです。老いて手足が不自由になってから、それを補えぬと思ってしまうえば、「万事休す」です。這いつくばっても、「ご臨終です」と言われても、死神に口述筆記をさせたく、念じております。

まほろば賞

読者賞

「見返り」

（「季刊作家」100号）

佐藤文平



佐藤文平

さとう ぶんぺい

1947年生まれ
東京都足立区出身
「季刊作家」同人



読者賞

受賞の言葉

佐藤文平

この度は「読者賞」を頂き感謝します。また『季刊作家』が「奨励賞」と「百号賞」のダブル受賞となり、重ね重ねお礼を申し上げます。

山田洋次監督が彼の最新作を取り上げたテレビ番組の中で、『怪物』の是枝裕和監督に「近頃の映画は暗いものが多いね」とやや否定的な口調で話しかけるシーンがあつて、返答に窮している是枝監督の様子が印象に残りました。その傾向は今回の「まほろば賞」の選考にも現れたように感じます。無論善し悪しの問題ではなく時代的な背景が反映された結果なのだろうと受け止めています。

今後とも「老驥（ろうき）（木偏付き）」に伏するも志は千里にあり」（曹操）の気概を忘れずに、犬猫のアシスト抜きでゴールを目指したいと思ひます。



西田宣子

まほろば賞
優秀賞
「白詰草」(「季刊午前」60号)



西田宣子

にしだ のぶこ

1945 年生まれ 福岡教育大学卒業
1991 「青い魚」で福岡市市民芸術祭賞
92 「マウス・ブルーダー」で九州芸術祭・福岡県地区優秀作
94 同人誌「季刊午前」同人となる
98 「チョウチンアンコウの宿命」で『文藝界』1998 年度上半期同人雑誌優秀作
99 福岡市文学賞
2004 「楽髪」で『文藝界』2004 年度上半期同人雑誌優秀作
著書
「チョウチンアンコウの宿命」(2013 梓書院)
「おっぱい山」(2017 梓書院)
「季刊文科セレクション②」(2019 / 7 人の共著「風の海」所収)
※「白詰草」は連作
1. 「白狐」(季刊午前 59 号、主人公 35 歳、下園果林)
2. 「風の海」(季刊文科、46 歳)
3. 「白詰草」(季刊午前 60 号、75 歳)

読者賞について 読者から持ち点制の感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ります。今回は投票金合計金額は 61200 円となりました。これ得票に従って配分し、各著者に贈らせていただきます。

全国同人雑誌振興会

優秀賞

受賞の言葉

西田宣子

書くことは喜びです。毎日が輝きます。
「季刊午前」の月一回の例会での仲間たちとの励まし合いが、何よりの栄養になります。その上、同人誌の仲間たちだけでなく、思いがけない所で思いがけない方たちに読んでいただけて幸福です。今後もマイペースで描き続けたいと思います。ありがとうございます。



祖父江次郎

そぶえ じろう

1951 愛知県生まれ
69 年高校卒業後
2013 年まで地方公務員として就労
92 文芸同人誌「季刊作家」同人
2013 より 文芸同人誌「季刊作家」代表、現在に至る

読者賞

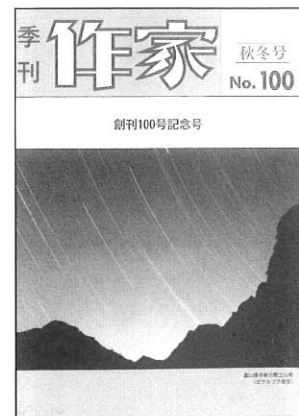
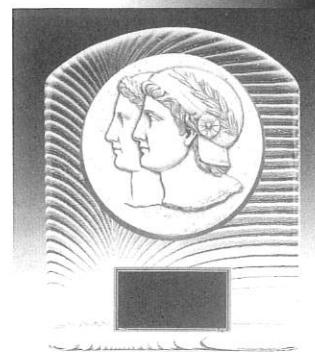
受賞の言葉

祖父江次郎

このたびは、幸運にも最優秀読者賞の栄えある賞をいただき誠にありがとうございます。選考委員並びに読者の方々に感謝しております。
これまで、五十余の小説作品を書いてまいりました。高邁な文学思想もなく、寂しい人生に少しでも潤いが得られればと我流で書き続けてきたにすぎません。
受賞作品「枯野」については、以前から高浜虚子の「遠山に日の当たりたる枯野かな」という俳句が念頭にあって、この風景と自身の心象風景をからませた小説を書こうと企図した作品です。
これを機に、さらに新しい作品に挑んで精進してまいりたいと考えております。

まほろば賞
読者賞
「枯野」(「季刊作家」100号)

祖父江次郎



●読者賞への御投票と賞金をお送り下さり、まことにありがとうございました。読者賞は下のよう
な結果となりましたので、ここに詳細をご報告させていただきます。

作品名 投票者	白詰草	血の湯	見返り	枯野	青山墓地 の桜	浜辺のリズ	エリザベト を選んで
木内是壽				30			
横田真紀子		20	20		20		
山田真己乃	10						10
渡辺恵理					20	10	
西田宏明			30	20		9	20
相田信子			30	30		10	
夏木宏子				20			30
外村晶子	10		20				
宮永瑛子		30		18			
渡辺 聡	10		8		30		
志村 譲		20			30	10	20
寒河江仁			10			10	18
山田まさ子	1	1	2	2		1	2
木村弥一		20					
計	31	91	120	120	100	50	100

各作品寸評

- 「白詰草」は連作なので、これだけで評価するのは無理なのでは…… (外村晶子)
- 「枯野」の文章力が素晴らしい (木内是壽)
- 「血の湯」は何か生命の根源に迫るような趣及に魅せられた。現代の日本には見られない表現は魅力。おどろおどろし世界の底に生命への深い愛がある。 (宮永瑛子)
- 「見返り」は、文章が滑らか。自然にその世界へ連れていってくれるわかりやすさがある。さりげない日常の中に人生の晩年にとんでもないことが襲ってくることを示している。誰でも起こり得ることかも。 (寒河江仁)
- 「青山墓地の桜」はよかった。米兵の愛人になる女性がとてもよく書けていて、いつまでも胸に残る。これから青山へ行ったら、この話を思い出さう。 (志村譲)
- 「浜辺のリズ」は、犬が生きていて、とてもいい。動物の心が人間にも溶け込んでくる。動物好きには、たまらない魅力。主人公の優しさが、よく伝わってくる。 (渡辺恵理)
- 「エリザベトを選んで」は、救いのない状況に、あえて救いを与えてところが、緊迫度を高めている。でも、宗教がなかったら、救われないのか。 (志村譲)

まほろば賞作品感想

今年のまほろば賞候補作は、切ないくらいテーマの作品が多かった。読者賞は「枯野」「エリザベトを選んで」のうちどちらかと思う。両作品とも書き出しから、ぐいとひきつける力量があった。

「白詰草」 西田宣子

エッセイ風の語り口の作品。たんたんとしているが洒脱であり、ことに主人公と夫とのやりとりがユーモアのセンスが感じられ、楽しい。

「元素の僕とすれ違ったとき、知らん顔して逃げるなよ」という夫の台詞は愛らしい。読者としては主人公の昔の恋人らしき、画家の峯信一郎との過去をききたいが。この小説は恋愛がメインではなく、主人公が老いて感じるさざ波のような人生観がテーマのため、恋の想い出への言及はない。

主人公の戸惑いや人生への達観は、多くの同世代女性に共感と呼ぶと思う。身近な素材から巧みに編み上げた作品。

白詰草や巨大杉がメインなので、冒頭の「草紅葉」はいらないのではないか。ここは説明的になってしまい、惜しい。

「血の湯」 寺本親平

金沢に語り部がいたのだと、わたしは独り言ちた。異形のものゝいる幻想世界が、琵琶の音にのせて語られている。想像力をもっとも掻き立てられた作品である。

浅野川にかかる橋の上を、からんからんと下駄を響かせて

歩く大柄な着物姿の男が思い浮かぶ。その後ろを異形の者たち、作中に登場する山棟蛇や蜥蜴、百足などが行列をなし、本作の言葉を使えば、「新たな血の盟を生みだし、不思議な光芒を放ちはじめ」ている。作者の琵琶楽師には常人にはみえない結果の先が見えるのではないか。

わたしがそんな想像を巡らせたのも、去年、泉鏡花の家の近く浅野川沿いを散歩したとき、「鏡花のあとに続く語り部はおらぬのか」と問いかけていたせいである。どうやらここ金沢にいたようだ。

おどろおどろしい描写が続くが、作品そのものは、天の川に浮かぶ船に水晶玉に眠る子供を連れた家族四人が乗り込み、琵琶の音に送られる所で、一枚の絵のように集約される。綺麗に収束されることをよしとするか、もうすこし不安定に終わるかを選ぶかは、好みの問題であらう。

「見返り」 佐藤文平

軽快な語り口である。松本清張を思わせる日常の中にひそむ人の悪意がテーマである。こわい、と感じたのは、わたしだけではあるまい。夫婦の秘密が死後に知られることはたまにあるので、現実的な出来事でもある。

同僚を陥れた三国は一方的な男であり、本来は墓にもっていかねばならない話を妻を失った元同僚に聞かせるのである。自分の気持ちをラクにするための告白である。自慢しなかったのかも知れない。同僚にアキた自分の女を押し付けたうえ、隠し通す良心もない。身勝手な男である。この

世に妻の過去など聞きたいものがあるだろうが。

聞かされた主人公は何も言い返せず、まことに情けない。読者としては腹立たしいが、同時にこうも感じた。騙した相手の気持ちにもほだされるような、この善意の人の情けなさ、作品に淡いペーソスを感じさせている、と。

余談だがわたしの父も、三国のようなことをやったのである。主人公に代わって殴ってやりたい。

作品の展開は演劇的であり、土下座のシーンも活気がある。小さな小屋の二人芝居で演じても似合いそう。

「青山墓地の桜」 萩原紫香

戦後の麻布を舞台に、米兵の愛人女性になっていた少女が主人公である。クッキーもくれるやさしいお姉さんについて意地悪をしよう、少女らしい感覚が繊細に書かれている。素晴らしいと思ったのは、吊るしたネクタイが「地面すれすれに垂れて」という表現である。このすれすれという形容詞が、このお姉さんが人生をすれすれに生きてきたとも取れるし、もう少し何か助けがあれば生きていかれたのかもしれないと思う主人公の少女の悔恨とも重なる。

甘やかでデリケートな語り口がこの作者の持ち味である。一九四六年生まれということで、この時代の少女ではなく、前の世代への果敢な挑戦と透明感のある色を応援したい。

「浜辺のリズ」 藤本あずさ

犬の反応を表すところに面白い表現が目についた。ハッピーが戻ってきて吠える場面。「私がオーケー出してやった

聖書の引用は少し多いかもしれない。ここも好みの別れるところであろう。

「枯野」 祖父江次郎

この作品もまた数行読んで、入賞と思わせた。文学性の高い作品である。ああ、だけど、祖父江さん、こんなにも民生委員を目的の敵にしないで。元民生委員としては、作中の民生委員のタイプがいけないこともないが少数なので、忸怩たる思いにとらわれた。

枯野どころか、おおいに人生に未練のある主人公である。妻亡きあと、運動もかねてスーパーのベンチに座っている。

わたしは常々、スーパーで座っている老け切っていない男たちが、時折ちらりとわたしの買った物袋を羨ましそうに見やると、不思議に思っていた。葱や大根ののぞいた袋である。その視線の意味をこの作品は教えてくれた。

表現では「イチヨウ畑がまるで骨だけになった老人たちの群れのように」という所が、ユーモアがある。その直後の太陽光のパネルも現代的な描写である。

尿意は少し多いかもしれない。

青森からきた出稼ぎの利那主義について描いた部分で「付けで飲むのも珍しくなかった」とある。まるでツケで飲むのが悪いことのような。ツケは庶民はあたり前、昔は普通の人は酒でも醤油でもツケでしょうが、と言いつ返しなくなった。しかしそんな細かい不満は吹き飛ばすほどの高次元の作品である。

んだから」というふうに犬が話しかけたとある。

主人公は、犬が好きで、ALSの患者さんの犬をボランティアで世話している。「気位の高い犬」は、主人公と飼い主の会話の意味を理解している。主人公の飼いだりズもまた人間の会話を解する。主人公がご主人の悪口など言うと、吠えるのである。

だが、問題発言もある夫についてはそれ以上の掘り下げはなく、主人公も結局聞き流す。難病という重い素材である。わたしがこの作品で気に入っているのは、犬も人間もいきものとして同等に扱われている点である。絵の中の裾の濡れたマリアを眺めて、愛犬の出自を思い浮かべる。心やさしい書き手である。作品全体は明るく、作風にも好感が持てる。

「エリザベトを選んで」 蒔田あお

最初の数行でこれは入賞するだろうと思った。小説らしい作りである。自殺した母と弟、過去を抱えた主人公はダメ男の陽平を好きになる。「人間らしい感情」を宿らせてくれた陽平もまた家出した母親のため両親の愛情を受けずに育った。ともに機能不全家族に育ち、典型的な依存と逆依存の関係性が描かれる。いきいきとした大阪弁が、リアリティをもたらし、した。

主人公は末期癌となり、赤ちゃんを抱えて切迫したとき、夫は頼りにならない。子供を児童施設に預けなければならぬ。この境涯を支えているのは、昔から面倒を見てくれてアトバイスをくれていた。先生や牧師、聖書である。

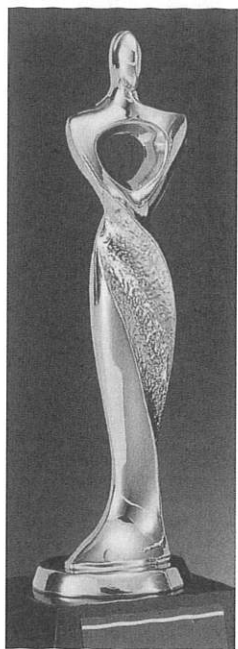
河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしましたが、銀華文学賞の一時中断以後まほろば賞のなかに移されることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、記念品、賞金十万円が授与されます。(二〇二二年改訂)

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



枯野

祖父江次郎

今朝は空気が入れ替わったように冷え込んだ。急に来る寒さは一段と気が滅入る。不意に寂しさ呼び起こすのだ。また冬が来るのか。早くこの寂しさから抜け出したい。生きることは辛さを重ねてゆくことだ。海老のように丸まって目を閉じる。いつそのこと、海老に変身して、猫の餌になったほうがいいかもしれない。左耳の耳鳴りが大きくなった。年がら年中セミが鳴いているのだ。……ようやく寂しさが薄れて煎餅布団から抜け出す気になった。

武雄は、築四十年経つ木造家屋でも、自分の家があることほど有難いことはないと思う。どんなに傷んだ家でも雨風をしのぐことができる。賃貸アパート住まいなら多くの制約があつて、周辺に住んでいる人たちに気遣つて生活しなければならぬ。結婚して子どもができるまで市営住宅にいたのでわかる。むろん、家族があることは幸せなこと

こうなれあなれと希望ばかりを考えるのは心を追い込むだけだ。この先何年生きるというのだろう。もし、武雄が瀕死の状態であつた妻が生きていたなら、先のことを妻に伝えることはあつただろうが、その妻はすでに彼岸に旅立っていない。死者の希望を推察して生きてゆくのも無意味だと思ふ。

淳子がガーデニングを趣味にして四季折々の花々に水やりをしていた散水栓も使うことはない。花に興味のない武雄は、家屋の南西前に植えてある南天と門の近くの蠟梅だけは残して、庭も家の裏側の空間もコンクリートを敷き詰めて草が生えないようにした。南天も蠟梅も手がかららない。蠟梅は、正月過ぎに黄色い花を咲かせ、高雅な匂いを放つ。南天は難を転じるといふ縁起物だが、赤い丸い可憐な粒の実が好きだったから残したのである。人が一人いなくなると、こんなにも家の中も外も変化するとは考えが及ばなかった。めっきり訪問者も減った。ただ茶色のトラ猫が棲みついてから、猫の鳴き声が聞こえるようになった。

武雄は、妻の一周忌を済ませて間がない雨の夕方に猫の鳴き声を聞いた。玄關の横の居間のガラス戸の外にミャア、ミャアと寂しげに鳴きながら行ったり来たりしている姿が映った。腹が空いたのだろう、家の中に入れてほしいとせがんでいるのだ。雨が激しくなつて、ふたたび、ミャア、ミャ

でもあるが、自由から遠ざかつてゆくこともある。大企業に勤め、都会に居を構えてそこで骨を埋めるといふ夢も叶わず、生まれた地域で生涯を終えようとしている。

武雄は一人になつてから、テレビが置いてある一階の居間で寝ているし、食事もそこでしている。娘の美香が使っていた二階の四畳半と六畳の部屋は、彼女が嫁いでからは妻の淳子が寝室にしたりくつろぐ部屋にしていた。いまは空き部屋になり、一階の西側の六畳と八畳の部屋も物置に成り代わっている。もし美香が婿さんを迎えたらこの家も建て替えられて継がれてゆくはずだったが、美香は跡取りの家に嫁いで南条家の人間ではなくなつた。嫁ぎ先のしきたりで生きてゆく。だからこの家はあるもろん、この土地もいずれ処分され絶家になる。武雄は、そのことにこだわりのない。未来のことを考えたとなつてなるようにしかない。

アと扉の前で悲しげに鳴く声がある。扉を開けると、部屋を窺うようにのぞいている。武雄は中に入れてやつた。すると寄つてきて、ぶるぶると体をふるわせた。雨滴が飛び散つた。茶色の毛が肌に張りついて骨にまで染み入っているようにずぶ濡れだ。どこにいたのだろう。人懐っこいからどこかで飼われていたような気がする。帰る家がわからなくなつてしまつたか、それとも捨てられてしまつたか。痩せこけた軽い体を抱いてやつたが元気がない。

武雄はごはんに鰹節とその夜のおかずにするために作り置きしておいたアジの煮つけを皿に用意してやつた。するとアジにかぶりつき、半分ぐらい食べると満足した表情でやぐら炬燵の布団の上にゆっくりと身を横たえた。右足で顔を洗つて、首のあたりを幾度も舐め回すと一瞬武雄を見て、あくびをしてから目を閉じて眠つた。眠れ、眠れとつぶやきながら喉のあたりを撫でてやる。気持ちよさそうにゴロゴロと喉をならす。子どものころ、家に猫がいたので、少しは習性もわかる。機嫌がよさそうなときに抱いてやろうとすると突然噛みついてきたり爪で引っ掻いたりされた記憶がある。家の主だろうと誰だろうと容赦がない。それでも可愛かつた。冬になると炬燵代わりに抱き、兄と取り合つていた。

その日、くつろいだ表情で一時間余り眠っていた猫は何かを思いついたように突然むくつと起き上がり、尾を立て

て外へ出て行った。武雄は昼食を終えてから眠っていると、猫はもどつてきて、何年も住んでいるかのように武雄の傍らに身を横たえた。そうして押しかけ女房のように武雄の家に棲みついたのであった。トラを小型にしたような茶色のトラ猫だ。子どものころ家で飼っていた猫に似ていると思つたのでタマという名前が浮かんだが、妻の「淳」と英語の六月の「June」からジュンと名づけた。

ジュンは気まぐれに外出する。狩りに行くか、それとも恋をしているかもしれない。武雄が淳子に恋をしていたとき、仕事のことで彼女に会いたくて外出ばかりしていた。どこでもよかった、一緒にいるだけで。猫にもそんな時期があるだろうか。

ジュンは一日や二日の外泊はしよっちゅうで、今回は三日も出ていったまま帰って来ない。狩りの楽しさに魅せられて疲れも忘れてしまったのだろうか。よほど腹が減つていれば、飼い主が用意した食べ物に食らいつくだろうが、外で見つかればそれに勝る獲物はない。飼い主の勝手な考えで手なずけるから、甘えてくるのだ。が、フーテンの寅さんさながらに狩りに出かけて行く。人間よりはるかに遅い。一度与えて気に入るとせがむことはあるが、本能的にキャットフードより生きたネズミを食べたいのだろう。瀕死の状態になるまでもてあそび、両手で押さえ込ん

揮すれば食い物にありつくのは朝飯前のことなのだろう。

武雄は次第に落ち着かなくなり、支度をして探しに出かけようとした。そのとき、ミヤア、ミヤアと鳴き声が聞こえた。ジュンか、やつと帰ってきたか、どこに行っていたんだ、心配していたんだ、寂しかったよ。

武雄が扉を開けると、ジュンは跳び上がって中に入り、マグロの切り身が盛つてあるアルミの器に向かって一目散に駆けて行った。やれやれだ。武雄の心は和んだ。

武雄は妻が存命のときは、一人のほうが余裕があると思ひ込んでいた。それが実際一人暮らしになると思ひのほか出費が多く節約を心がけるようになった。家にいる時間が増えたせいも、電気代や水道代やガス代が倍ぐらいになったからだ。そのために風呂も三日に一回ぐらいに減らし、それもシャワーで済ます。携帯電話もほとんどが淳子との連絡用だったので処分した。所有していないと困ると思つたが、むかしは、なくても普通に生きていたのだ。年賀状もやめた。新聞も取るのをやめた。固定電話は市役所や自治会長や民生委員や娘の美香との連絡用のためにやむを得ず残してある。

最も支出が大きいのは車だ。車を処分すれば、相当に支出が抑えられる。五十年余も世話になっている文明の利器。中古車でも新車でも大衆車ばかりに乗っていたけれど

でゆっくりと肩のあたりから食べはじめた。武雄は子どものころに、ネズミ捕り係として飼われていた猫が、薄暗い台所の奥で、捕らえたネズミを食べている一部始終を見ていたことがあった。見事な食べっぷりで、しっぽだけが残されていた。生臭い血のおいはいまだに脳裡に焼きついている。また、ヘビやトカゲやカエルを捕らえてきててもあそんでいたことや、庭の椿の木に一気に駆け登り、まるでサーカスの曲芸のように止まっているセミやスズメを電光石火に捕らえるところを目の当たりにして感心したことを覚えていて。その中でネズミは狩りの醍醐味を味わわせてくれ、かつ食べ物としても最高のご馳走だったと思うが、ジュンは一度も捕らえてきたことがない。ヘビやトカゲ、スズメやセミを捕らえてきたこともなかった。武雄は、狩りの成果がなくストレスで草臥れてしまっているのではないかと同情する。それにしても三日も食べなくて生きていられるだろうか。その家にあきた猫はある日突然、放浪の旅に出てそのまま帰らないことがあるような気がする。子どものころに飼っていた猫もそうやって行方不明になった。餓死したか、獣に襲われたか、車に轢かれたか。ジュンもそういう目に遭うのではないかと心配するが、おそらく武雄の知らない所に食べ物があるのだろう。どこかの食堂の残飯か、生ごみで出される弁当か、野良猫が集まる所に、愛猫家が餌をやっているかもしれない。その鋭い嗅覚を発

も、二十歳のころからつい最近まで七台の車に世話になった。それこそ武雄にとっては足のようなものだ。都会のように交通網は発達していないけれども、山奥や孤島よりはマシである。病院通いは避けられないが、歩いて行くのが大儀なら自転車で行けばよい。それでも歩けるうちは歩こうと思う。一日に一時ぐらいは健康のために歩いたほうがよいに決まっている。歩けなくなったら、終わりと武雄は思う。もし遠方へ外出するなら電車で行けばよい。だいたい、そんな外出がこの先何あるというのだろうか。

それに高齢者の自動車事故が頻繁に起きてもいる。武雄も他人事でないと思うようになっていた。これらのことは優柔不断の彼には車を処分するきっかけになった。車を処分するとおのずと行動範囲は狭くなった。時々不意に、ラーメンが食べたくなったり、寿司が食べたくなったりしても車があれば出かけられない。我慢を強いられることが多くなったが、慣れてしまふとそれほど不便も感じない。

武雄は車を処分すると、家の中に籠っている日が多くなった。趣味らしい趣味もない武雄に気がまぎれることは家の中にはない。それでも人と接していても気分がすぐれぬことはないから、老人クラブにも加入せず、近所とのつき合いもしない。しかし家にいればなんだかんだと訪問客がある。鬱陶しい。気ままに猫のように横になっているとまるで嫌がらせのようにやって来るのだ。これには参った。

人に会いたくないと思ったら居留守を使うが、出て行かなければならないときがある。特に今回、民生委員になった北川はよく訪ねてくる。こちらは何も頼ることもないのに。その前の安西という民生委員は、迷惑はかけないから来てくれるなど断つたら来なくなったが、北川は「そう言われても困るんです」と突然やって来るのだ。北川の態度こそ大きな迷惑である。であれば、外出するにかぎる。大きなお世話から逃れるために。

武雄は、おにぎり昨夜のおかずの残りを携えて近くのスーパーマーケットで過ごすことにした。幸い徒歩で十分あまりの所にある。歩いて往復するには適度な距離である。自転車で行くことも考えたが、健康のために歩くことにした。いつでも適度な気温が保たれている無料のオアシスはほかにはない。椅子で休んでいると、見たことがあるような顔がチラッと見たり、誰だろうと見つめたりして歩いて行く。すると視線をずらしたり、俯いたりする。そうすれば話しかけてくる者はいない。人から逃れるためにここに来ているのに、話しかけられたらまったものではない。

今朝ジュンが外に出て行つてから、武雄はリュックサックにおにぎり二個と昨夜の残り物の焼きそばを入れ、水筒をぶら下げて家を出た。師走に入ったが、最高気温は十五

いぐらいの人間関係の希薄な所がよい。元より、金があればこの地を去って、都会のマンションに引っ越ししたいと思っていたが、それも実現できずにいた。

武雄は、いつも通る道を三百メートルほど歩いて、真っ直ぐに行かず、右に曲がった。滅多に歩かない道だがスパーに通じるはずだ。武雄がこの地に家を建てた四十年前は、田圃や畑が広がっていたが、いまはすっかり風景が変わった。しばらく常緑樹の植木畑がつづく。そこを通り過ぎるとタンで囲った廃棄物の集積場があった。その隣には少ない髪を黄土色に染めた老人の頭のような枯れ草の廃園が広がっている。除草剤でもまいたのだろうか。その先にはおおかた黄葉を落としたイチヨウ畑がまるで骨だけになった老人たちの群れのように枝を差し交し広がっている。どこからともなく煙のにおいが漂ってくる。落ち葉でも焚いているのだろう。野焼きは禁止されていなかったか、たしか。

以前、家の裏で焚火をしていたら、消防車がきて注意をされたことがある。誰かが通報したと思ったが、それ以来焚火はやめた。冬に近づくとも木々が葉を落とすから、焚火をする人が多くなる。明らかに落ち葉を焚いている煙のにおいだ。

昨年オープンしたばかりの介護施設のある方角から漂ってくる。この街にはこの十年のうちに五か所の介護施設、

度とニュースで報じていた。ここ数日の寒さに慣れたから空気が温かく感じられ、気分は悪くなかった。歩くのも大儀ではない。自分のペースで歩いてゆけば、十分余でスーパーマーケットの『フレンドリー』に到着する。

今日は別の道を歩いて行こう、と思った。昨日、顔見知りの、皺の中に顔があるような大柄な婆さんに、行く途中の路上で会ってしまったのだ。武雄はこの婆さんを以前から嫌っていた。たしか武雄より十歳余年上だと記憶している。こんなことがあった。妻が亡くなって四十九日も過ぎたころのことだ。路上で出会って呼び止められ、寂しくなりましたねと言葉をかけてきて歌舞伎役者が睨みをきかせるように見つめた。世間話が三度の食事より好物で、話し相手を見つけない毎日集落中を歩き回っている、という老婆だ。武雄はこの老婆に睨まれたら気分が悪くなると思い、足早に去った。相手になったりすると妻の死の原因など聞かれて無駄に時間を取られてしまう。

ところが、それから数日して、妻が浮気をして武雄が悩んでいたという噂が広まっていることを知らされた。あることないことを喋り散らして人が困っているのを楽しんでる輩なのだ。人の不幸を蜜を舐めるように楽しみに変えてしまう輩が後を絶たない地域である。その代表だ。誰かが言っていたが、百五十まで生きるぞ！それが当たっているから不思議だ。武雄は隣に誰が住んでいるかわからな

特養二施設と老健一施設とグループホーム二施設が開所したのだ。いずれもすぐに満床になったが、まだおびたしい待機者がいるという。たしかに高齢化率が上昇して、要介護者も増加しつつあるが、田舎に建つ介護施設も都会からの要介護者ですぐに埋まってしまうらしい。これではいくつでいても追いつかない。

さらに進むと太陽光のパネルが見える。まったく知らない場所に來たみたいだ。ここには二階建ての家が建っていたはずだが。そこを過ぎると、昼間でも薄暗い、獣でも棲んでいそうな雑木がこんもりと繁る森に入る。ひんやりとする。鳥の鳴き声が響いてきた。様々な動物が潜んでいそう。所々に落ち葉が堆積している。赤や橙の葉をつけた木々の隙間から、柔らかな日射しがわずかに入ってくる。少し気分がほぐれる。空が広がって古ぼけた平屋があった。明らかに人の気配がない。空き家は最近多くなった。

ふとジュンの姿が頭に浮かんだ。いまごろ狩りを楽しんでいるだろうか。トカゲを咥えて勇ましく帰ってくる姿を思い浮かべた。

そう言えばつい先日、アライグマに注意を！という回覧が回ってきた。ベットの犬が家に入つてこようとしたりアライグマと戦ったというエピソードと、繁殖力が強く雑食で狂暴だという特徴が記されていた。この地域では野良犬はまったく見なくなった。野良猫は恋の季節に鳴き声を聞

くことはあるが、むかしにくらべれば減った。その代わり
にむかしはいなかった動物が棲みつくようになった。その
最たる動物がアライグマのようだ。飼っていたペットが、
解き放たれ野生化して増え、畑が荒らされている。ハクビ
シンもいるらしい。アライグマが、空き家に棲みついたと
いう噂もある。畑の小屋から現れたという話もある。夜に
林道を歩いていると、獣らしい目が光って走ってゆくのを
見たことがある。それがアライグマだった。また道路に犬
や猫とはちがう動物が車に轢かれて胴体から血の付いた内
臓が飛び出しているのを見たことがあった。それもアライ
グマだった。こんもりした森の中を歩いているとアライグ
マに会うかもしれない。が、人間を襲う可能性は低いらしい。
森を抜けるとT字路になって南北の県道に出た。歩いて
きた道は幅が狭いせいか、誰とも会わなかった。カラスの
恫喝するような鳴き声が喬木の梢から聞こえるばかりで
あった。斜め北前方に『フレンドリー』の白い塗料の禿げ
かかった看板が見え、五分も歩くと、入口の駐車場の前に
出た。マスクをはめる。積極的にはめるわけではない。世
間のマナーというかルールとしてはめるのだ。コロナに
罹^かつたら、高齢者や基礎疾患の持病のある者は、重病にな
りやすいということだが、もしそうなくても妻もいないし、
娘の美香はいても、千葉にいて、お盆やお正月に帰って来
ることもない。減多なことで電話もかけてこず、つき合い

も希薄になっているから、しかもそれほど惜しまれるほど
の年齢でもないから、父親の死などそんなにショックも受
けないのではないかと思う。寝たきりになって、身動きで
きない状態で無駄な医療費を使わされて生き長らえるほう
が悲惨だ。罹^かつたら罹^かつたときだ。罹^かつて人生を閉じる。
そのほうが、迷惑をかける度合いも少ないだろう。
そんなことを考えながら歩いて行くうちにスーパリーの入
口まで来ていた。開店したばかりの『フレンドリー』は平
日のせいもあってか、まだ閑散としている。
武雄は中に入った途端、急に尿意を催してきた。一階の
専門店の並ぶ通路を真っ直ぐに行き、トイレに向かった。
ここに来ると条件反射のように襲ってくる。家を出るとき
に用をたしてから三十分も経っていないのに。齢とともに
頻尿に悩まされることを聞くが、自分がこんなふうになる
とは想像だにできなかった。いつからか、かなり前から回数
が増えてはいたが気にするほどではなかった。このごろは
急に催すので、前立腺が肥大しているか膀胱に異常がある
かもしれない。毎月糖尿病で受診している医者にはその話は
していない。日常生活に大きな支障があるわけでもないし、
腎臓もひと月前の検査では正常だった。先日テレビの健康
番組を見ていたときに、腎臓が機能しなくなったら死がそ
んなに遠くないと思った、特に高齢者は。サイレントキ
ラーが、体に棲んでいるのだ。肝臓然り、腎臓然り。しかし、

この齢になれば誰でもどこか悪いところはあるに違いない。
武雄はトイレから出て、尿が左腿から伝って膝の下まで達
したのを感じた。尿漏れだ。気をつけているつもりでも、
尿が残って後から垂れてきてしまうのだ。一日に一回は必
ず尿漏れを起こす。これが頻繁になると体からアンモニア
臭がするのが自分でもわかる。そのため二日に一回は洗濯
をする。妻の淳子がいるときは洗濯などしたことがなかっ
たが、他界してからルーティンになった。

武雄はすっきりした気持ちになって本屋の前の茶色の長
椅子に腰かけた。彼はコンビニで買ってきた新聞を広げた。
この日は、政治家の汚職の記事が大きく取り上げられて
いた。文化会館の建設工事に関わる発注で、予定価格を教
えた見返りに、Y市の幹部と市議員が百万円ずつ賄賂を
受け取ったという。悪い奴はいつの時代も世界中で出現す
る。犯罪がなくならないはずだ。今年の二月にロシア軍が
隣国のウクライナに侵攻し多くの死者が出ている。建物を
破壊して瓦礫の山を築いてもなお止めようとせず、いまだ
に侵攻がつづいている。ロシアのやりかたは、暴力団が暴
力で理不尽極まりない理由をつけて縄張りを奪おうとする
行為と同じだ。しかし初めのうちこそ非道な侵攻をつづけ
るロシアに腹立たしくなったが、次第に関心は薄れ、いま
はその記事にも慣れて見出しを見るだけで中身まで読まな
いことが多い。ただ早く止めてほしいとは思っている。長

引けば長引くほど犠牲者が増えるだけだから。このニュー
ス記事を読むと、いつかロシアが日本に攻めてきて戦争に
なるかもしれないという不安に襲われる。もう自分は長く生
きたからよいが、これから先が長い孫たちのことを思うと
平和になってほしい。ロシアのウクライナ侵攻の記事を見
ると気分が悪くなる。終わりがあるだろうか。自分が死ぬ
ときには終わっているだろうか。つづいて三面記事を皮切
りにスポーツ、文化欄、生活欄、政治面と読み進む。内容
を読むというより文字の上を目でなぞっている感じだ。だ
から、何が書いてあったか忘れてしまっていることが多い。
記憶したとてなんの益にもならない。

一時間ほど新聞を読むと目を閉じて椅子に凭れた。目を
閉じて時々来し方を振り返る。息苦しさを覚え、マスクか
ら鼻を出す。波乱万丈とまでは言えないが、充実している
人生とはとても言えない。これではいけないといまでも思
う。そう思ってもこの齢になっては一念発起する気力もな
い。何しろ充分な金がないのだ。宝くじに当たるか、競輪
で大穴でも当てるかと非現実的な空想にひたるが、肝心の
軍資金にする金もない。武雄は自堕落な生活をしてきたつ
もりはないが、いつでもひもじい思いで過ごしてきた気が
する。

武雄は高校を卒業すると自動車部品工場に就職した。そ
こで二年勤めて退職し、しばらく家でぶらぶらしていた。

大学に進学しているなら親の脛を齧っているだろうから、慌てることはない、長い人生だ、種々の仕事をしてほんとうにやりたいことを見つけるまで焦ることはないと自分を甘やかせていただろう。武雄が大学に行かなかったからか、両親も彼が会社を辞めてぶらぶらしていても、強く咎めることはなかった。

武雄は退職して半年もすると焦りを感じ、ハローワークで仕事を見つけて働きに出た。父の友人が、印刷会社を紹介してくれてそこに就職した。従業員が三十人ほどの小さな会社だったが、とにかく就職したので両親も安堵した。武雄は仕事の内容より一緒に働く同僚の優しさに触れて、ここなら定年まで働いてもよいと思ったのだった。

武雄の素朴で人柄のよさは上司にも目に留まり、二十七八歳のころ女性を紹介してくれた。器量はまずまずで平凡という言葉そのもののような田舎臭い素朴な女性だったが、一歩下がって夫を支えるような控え目な性格を気に入った。片思いは幾度もあるが、初めて恋と言えぬ心境に陥った。それこそ寝ても醒めても淳子のことばかり考えていた。その思いは実って一年の交際を経て二十八歳になって結婚した。二人の間に美香が生まれ、特に大きな問題も生じず平穏な生活を営んできた。このころ、大恋愛をして結婚した従姉がわずか半年で離婚した。一方で、遊び惚けてそれが結婚してからもつづいていた叔父が、周囲の心配をよそに

円満な家庭を築いて金婚式まで挙げたのは意外だった。武雄は、その相反する二組の形態から結婚とは賭けだという意識を強く植えつけられた。同時に、人生も賭けだという気持ちになった。好いも悪いも運が大きく左右すると。

五十代にさしかかったとき、勤務していた会社が倒産した。武雄と一緒に入社した者が五人いたが、このときにはみんな転職して武雄だけが残った。それは給料が安いという当たり前の理由で、ほかは長くて十年勤めた者が最長だった。武雄は給料の安さよりも一緒に働いていた先輩に尊敬の念を抱いていて勤めつづけたが、会社が倒産して思うのは、結婚を機に辞めるべきだったということだ。武雄は、しばらくは失業保険で食いつなぎ、ハローワークで仕事を探し建築会社に再就職した。しかしそこでの仕事は、資材を運んだり掃除をしたりという体を使う雑役だった。事務系の仕事を希望していたが、不景気の只中であって、武雄のようなこれといった資格も技術もない者が就職できるだけでも幸運だと言われていた。月に十五日で十万円ほどの手取り。正規社員でもない五十代の転職では、収入は一定せず、家族三人が食べてゆくのは困難で、これまで貯めたお金を崩しながらぎりぎりの生活に迫られた。

その会社は社長が青森の出身のこともあって、東北から出稼ぎにきて、そのまま居ついている者も数人いた。みんな一様に酒飲みで、利那主義だった。建設現場を渡り歩い

てきた者が多く、たいてい人間関係がうまくいかず、安酒場で情報を入れていつかまた故郷に帰ろうという気持ちを持てずにいた。うらぶれた雰囲気は会社にも従業員にも漂い、酒を飲んでストレス解消をしていた。内臓が悪くても病院にもかかろうとしない。人生を投げたような顔にじみ出ている。刺青を入れていた者もいたし、前科がある者もいた。金の貸し借りも平気で、付けで飲むのも珍しくなかった。みんな酒色に沈面しているようで、ドス黒い顔をして艶がなく日焼けなのか酒焼けなのかわからなかった。雨の日や仕事の無い日は、酒を飲んでるか、花札やトランプのポーカールールやババ抜きをして時間を潰していた。そういう遊びのときも、金を賭けていた。賭けていないと子ども遊びと一緒に、まともにやる気が出ないのだ。が、賭けると真剣になり過ぎて、喧嘩になることもしばしばあった。それに賭ける金額が増えていった。あるいは景気づけに一升の酒を飲み直し、かなり良い気分になって行きつけの居酒屋や場末の低廉な飲み屋やいかわしい店に繰り出して行ったりした。そんな毎日の繰り返しであった。

武雄も誘われて酒場で憂さを晴らしていた。酒乱がいて、泣き上戸がいて、刹那的に生きている者が多かった。いつも欲求不満に陥っているようで、飲むたびに言い争いがあり、殴り合いの喧嘩も珍しくなかった。武雄はそんな職場の雰囲気嫌気がさし、このままこの中にいると身を持ち

崩すような不安を感じて、五十三歳で退職した。

武雄はその会社の同僚たちとの荒れた飲食が原因で、ぶくぶく太った。妻に一度人間ドックを勧められ、検診を受けると、糖尿病と診断された。診察を受け、結果を見せられたとき、糖尿病性腎症、網膜症、それに心筋梗塞、脳卒中、インポテンツ、壊疽などの合併症や症状を知らされて恐怖を覚えた。だが、自覚症状もないので恐怖も薄れた。

このままの状態なら、老後は人並みの生活ができるだろうと思っていた。常に摂取する食事のカロリーを気に留めていなければならぬが、それを妻に求めるのは気が引けた。彼女に伝えるのは、せいぜい食べる量くらいだった。管理栄養士が言うようなカロリーや栄養バランスを考えた料理を頼むことなどではしない。それをしてたら、妻のストレスが増え、別れ話まで出てくる可能性だってある。そうした妻への気遣いは愛情とは少しちがったが、人間としての当たり前の行為であり、夫婦と一緒に長く暮らしてゆくための秘訣ではないかと思つた。いたわる気持ちがあって、死ぬまで一緒にいられるのだ。

武雄は自律の意識が弱く、周囲の人間の影響を受けて糖尿病を患ってしまったが、仕事に従事できない体ではない。それに、働かなければ生活はできていかならないと思直した。彼は三か月失業保険で食いつないでから、警備員の仕事を見つけた。その会社は、慢性的に人手不足になっているよ

うで糖尿病の彼でも採用された。一日手取りで八千円。基本的に一人の仕事であり、気遣いもありしなくてよかったから、長つづきしうだと思った。そのころは、糖尿病も落ち着いていたが、最初二種類の薬の投与で済んでいたが、年を追うごとに高血圧症や高脂血症の病も増え、五種類の薬を飲むようになっていた。重病の合併症になったらもつと大変なことになると、診察のたびに医者が言うので、以前のように食べたい物を自由に食べたり、深夜まで酒を飲むことはなくなった。医師の話は、武雄のやすきに流れる性格を案じての優しいムチであった。武雄は素直に、毎月の診察も血液と尿の検査も欠かさず受けた。検査の数値に問題があれば節制しながら過ごした。

その甲斐があつて、彼は入院するほど悪くならなかった。多くの糖尿病患者は、自覚症状のないことに、例えば合併症が進行していることにも気づかず、体の異変を自覚するようになったときには入院しなければならぬほどに、合併症が進行している。武雄は比較的規則正しい生活をしていたので六十七歳まで仕事をつづけることができた。七十歳まで雇ってくれそうだったが、年金も支給されるのでリタイヤしたのである。もう充分に働いたのだ、のんびり隠居生活をして妻だつてがみがみ言うこともないだろう。

だが、退職後に有意義に過ごす方法を見出しはなかった。言葉では悠々自適と言うがそんな日常がくるのか、

ただ、妻は武雄に隠し事を持つているようで、それが気になった。収入を得るようになったので、武雄はその金の遣い道というか、家計の処理に関心がいき収支の状況を聞いてみた。妻はその返答を濁すような態度をしてその場を去った。彼は腹が立つて、これまでの収支を洗いざらい言えと詰め寄ったが、何をいまさらという感じで、彼の要望に応えることはなかった。

武雄がそれ以上追及するようなことは言わなかったのだ、激しい口論にはならなかったが、武雄の疑問はくすぶって頭の中に溜まったままだった。妻は結婚生活とともに次第に図太くなり、最後には武雄の神経を脅かすほどに強くなっていった。一つ屋根の下にいても、武雄は一人で外食をよくしたし、自分で食事を作ることもあった。こんなことなら別居してもかまわない。顔を合せるたびにふくれっ面を見るのも面白くない。武雄は当てもなく車を走らせて海や山へ行き、車中泊することもあった。そんな武雄の投げやりな行動にも妻は無関心に振る舞い、追及もしなかった。妻の無関心を想うと、武雄が倒れても、妻が介護してくれるか甚だ疑問に思えてきた。それでも二人は一つ屋根の下でそれぞれに生活していた。

表向きには平穏な日常を送っているように見えたが、梅雨に入つてどんよりした蒸し暑い日がつづいたころ、まさかと思う出来事が武雄を襲つてきた。

ほんとうのところはわからなかった。それは、退職すれば明らかに収入が減るからだ。もし自分の寿命が八十歳であれば計算できるが、実際のところはいつ死ぬかわからないので不安にさいなまれてしまふのだった。そしてその不安は、妻と二人だけになってより膨らんだ。そのころには娘の美香も結婚して、妻と二人だけの生活になっていたが、年金は思ったより少額で二人の口を糊するには厳しかった。妻はそれを見越していたようで、武雄が建設会社を辞めてから、『フレンドリー』でパートタイマーとして働いていた。思うに妻は武雄が働き者ではないと見限つていた気がする。それに毎日家にいて昼食が出てくるのを待っているだけの夫と顔を合せているのはストレスが増す生活だったようだ。武雄は夫婦の良い関係を保つために働きに出る決意をしたのだと好意的な見方をしていたが、それは自分に甘い武雄の勝手な解釈だったのだ。

結婚当初から、家計は妻にまかせていたので、武雄は月々の支出も知らず、貯蓄額も知らされずに過ぎてきた。家庭円満のコツは、家計は妻にまかせて亭主は口を出さないことだと会社の同僚たちの統一の見解で、武雄もそれに異論なく実践していた。ある家庭は夫が財布を握つていて、夫婦の関係はうまくいっていないと、いつ別れるかわからない不安定な状況に陥つていた。その反対に、専業主婦の場合はいまうまくいっている家庭が多かった。

武雄は、妻も花粉症で病院通いをしていたことは知っていたが、そのほかには病はないと思つていた。ところが、ある日突然、重病であることを告白したのである。妻が言うには、胃痛と診断され、一週間後に入院することになって手術が必要とのこと。そして主治医から妻の胃は緊急手術を要するが、すでに転移しているようで長くは生きられない状態になっていると知らされた。どうしてもつと早く俺に知らせなかったのだと、武雄は妻をいたわるより非難したい感情に見舞われた。だが、自分のことばかりにかまけていたからだ、それに二人の信頼関係が希薄になっていたからだと言ふ非難の矛先を胸に収めた。

妻は手術をしたものの、医師の診断に誤りはなく、その三か月後に六十七歳の生涯を閉じたのであった。武雄は自分が先に死ぬものだと思つていたので、妻の死を受け止めることはできなかった。妻も武雄が先に逝くものだというつもりだったはずだ。祖父も父も連れ合いより先に逝っているし、彼の周囲ではすべて夫が先にこの世を去つていた。楽しい思い出も少ないが、四十年も夫婦でいたのだ。想定外の事態に置かれた武雄は呆然とするばかりであった。最後は夫婦としての愛情がなくなり、険悪な雰囲気漂つていても、いざ妻がいなくなると武雄は意気消沈した。やはり妻はいたほうがいい。妻の死を早めた原因は自分にあるのではないかと思つた。家事全般をまかせて頼つてはいて

も、それに対する感謝もなかった。少しでもいたわりの気持ちがあれば、こんなにも早く彼岸に旅立つこともなかったのではない。だが、いままら自分の身勝手さを反省し嘆いたとてどうにもならない。こうなったのも当然の報いなのだ。であれば、なるようになれと武雄は破れかぶれになったのであった。いずれは時間が解決してくれる。どんな不幸も。武雄もそうして一人の生活に慣れた。

武雄は未明に目が覚めて、寝起きが悪かったせいか、眠りが深くなっていたが、幼児の泣き声と女のヒステリックな叫び声で目が覚めた。眠っているうちにマスクが唇の下までずり落ちていた。マスクを鼻まで上げた。母さんよ、そんなに怒りなさんな。武雄はその女を見てつぶやいた。それに睡眠妨害だぞ、どうしてくれる、図々しい女めとつぶやくと、女は子どもを抱き上げ早足で消えた。

新型コロナウイルスは収束を見ないが、人出は増えている。今日も通路を行き来する人々が増えてきた。みんなマスクをしている。話しながら通り過ぎてゆく。主婦が多い。そんな姿を見るときもなく眺めていると、急に寂しさに襲われた。武雄は目を閉じた。妻はやはりいたほうがよい。また目を開ける。若い女性や中年の女性が歩いて行く。彼の視線の先に桃のような胸の膨らみがある。その眺めは彼の心に訴えてくるが、どうにもならないと思って視線をはずす。

は小さな動物園という趣があり、犬や猫、ウサギや爬虫類、インコなどの鳥類、金魚や熱帯魚やメダカなども売られている。犬や猫はいわゆる血統証つきで、外国産が多く、四十万円の値札がついているものも珍しくなかった。どれも小さな明るい箱の中で目を閉じて蹲^{うすくま}っている。完全な個室が与えられているのだ。武雄は猫にこんなにも高い値がついていることに驚いた。ラクドール、ヒマラヤン二十九万四千円、マンチカン二十一万八千円など。いかにも経済的に余裕のある人間の慰み物という感じである。仮に十年飼うとして、一年で四万円それに毎月の諸経費を二千元と見積もると、十年間で三十六万円。武雄の少額な年金では手に入る代物ではないが、そのしぐさを見ていると癒されるのはたしかで、檻の中の犬や猫を見ているうちに半日ぐらいいは過ぎていった。誰でも好きになれば触れてみたい、飼ってみたいという気になると思うが、武雄も妻が逝ってしばらくはここに来て、猫なら飼ってもよいという気持ちになっていった。そんな折に、ジュンが迷い込んできたのである。

ペットコーナーにいるうちに尿意を催し、トイレに駆け込んだ。十一時半を少し回ったところだ。

「そろそろ食事とするか」

と心の内でつぶやき、もどるとキャップをかぶった老人が椅子にかけて居眠りしている。競輪場でよく見かける、

ぐに後ろ姿が目を射るが若いころのように心は逸らない。若さが横溢していたころなら、話しかけることもあったが、そんなことをしたら気味悪がられるのがオチだ。いくつになつたのだ、盛りのついた獣みたいな卑しい態度を取ると、人間性を問われるぞと、自身を戒めた。ただ、まだ生きていたいと思う。寒さで凍える真冬に一人家の中にいるこのまま意識もなく彼岸へ旅立ってもよいと思ったりするが、やはり此岸にいて嬉しくなることもある。そういう矛盾した感情が交互に心に巣食う。妻が他界する数年前から夫婦としての睦み合いはなくなっていたが、女性には興味があった。ここに来て椅子に座っている高齢者も女性に興味があるように見えた。高齢男性が一人でいると買ひ物をすることもなく来ている。ほかに行く所もなく、かといって家に閉じ籠っていることもできなくて足を運んでくるのだ。おそらく会社勤めの不自由さを経験したことが、より自由を求めさせるのであろう。誰にも縛られず指示も受けず自由でいたいのだ。それは自分の心と照らし合わせても、はずれていないと武雄は思う。彼に似た高齢者がいることを確認できて同類相憐れむという気持ちになる。

武雄はエスカレーターで二階まで上った。楕円の形になった通路を一周し、三階に昇るエスカレーターに運ばれてゆく。そこでまた通路を一周して、二階に降り、また一周して、一階までもどり、ペットコーナーを覗く。そこ

ギャンブルのにおいが染みついた男の格好だ。この時間になるとおおかた椅子は高齢者で埋まっている。男はたいいてい一人、目を閉じてぼんやりしているか、行き交う人を見ているか。女性は年配者同士で喋っている。入口のほうへ行くと一か所空いていた。武雄はそこで弁当を広げた。焼きそばをおかずにしておにぎりを頬張る。具は梅干しか入っていない、シンプルなものだ。一口食べ二口食べて咀嚼して五口で一つを食べ、二つ目も食べ終えた。体のあちこちにガタがきているが歯だけは良い。もともと歯質が良いから、虫歯で削った歯は二本しかない。歯槽膿漏で治療することもない。ここで食べていると好奇のまなざしでちらちらと見てくる者がいる。すると気になって見世物じゃないぞと腹が立ったり羞恥心を覚えたりしたが、毎日晒していると慣れてしまった。そうして遠慮のない視線には睨んで見返すようになった。すると、相手は視線をはずし急ぎ足になる。

イラつときた気分がおさまって、ゆっくりとペットボトルのお茶を飲む。少し眠気がきたので目を閉じた。食事をしてから眠くなるのはいつものことだ。一時間余り眠ると目が覚める。目覚めるとエスカレーターに乗って二階、三階へと上り、通路を一周あるいは二周して、一階にもどってくる。

椅子に座り、目を閉じた。もともと寝つきはよい。人の

視線を気にしなければどこでも寝られるが、最初この椅子に陣取ったときより早く寝られるようになった。

うつらうつらしかけたとき、南条さんと呼ぶ声を聞いた気がした。目を開けると、額の禿げ上がった小柄な男が目の前で武雄を見つめていた。半睡状態にいた武雄は、言葉に詰まって男の顔を見つめていた。男は前歯が二本抜けている。虫歯が抜けたのではなく、誰かに殴られたような感じがした。

「間違いだったら、ごめんなさい。南条武雄さんじゃないですか?」と聞き直してきた。

武雄は無精ひげの目立つ男を見つめ、ぶっきらぼうに、「ええ、南条ですが」と応えた。男は武雄を見つめている。この顔はどこかで見た顔だと思ったが名前は思い出せなかった。間もなくして、ぼやっとしていた頭に名字が浮かんだ。そうだ、小堺三次^{こさいみづ}ではないか。どうしてわからなかったのだろう。中学時代にはもともと深いつき合いをした男、小堺三次だ。中学以来だと思った。成人式で見たかもしれないが、記憶の中では消えていた。太い眉毛と将棋の駒を逆さにした顔形とずんぐりむっくりの体形は当時と変わっていないかった。低音で良く響く声も変わっていない。彼が都会の私立高校に進学して、その後東京の私立大学に学んだとは風の便りで知っていたが、それ以後のことは知る由もなかった。

が、おうおうにして不快な気分になることが多いのだ。

「うーん、今日はちょっと、午後には用事があるので」

武雄は、口から出まかせを言っただけで、小堺ははにかんできた竜巻のように武雄の心に入ってきた。急に押さえられて膝が痛んだ六十年前の痛みがよみがえってきた気がした。武雄は少し考える素振りをした。どうせ一時のつき合いだ。一度つき合ってやればそれで終わるような気がする。またこうも考えた。彼につき合うのも案外面白いかもしれない。いくら人との接触を拒んでも、相性がよければ楽しくなる。それに彼にはむかしの裕福なころの雰囲気が消えてしまっている。妻が他界してから、武雄もまともに人と会話を交わしていない。人と話すのに気乗りしないという意識があるにはあるが、一方で、誰かと話したいという気持ちもあった。

「じゃあ、明日は?」

小堺の強い口調にも曖昧な表情を浮かべただけだったが、「明日なら、時間はあるよ」と承諾した。

すると小堺は笑顔になった。中学時代の一時期につき合いがあったからと言って、それほど仲がよかったわけではない。懐かしさから、旧交を温めるという関係に発展する可能性もあるが、武雄はそんな気はさらさらなかった。

当時、小堺の裕福さに負い目を感じていたせいか、イヤでも命令に従っていたのだから。武雄から見れば、小堺は

「ああ、小堺君か」

武雄が立ち上がると、彼は微笑みながら握手をしてきた。武雄は小堺に対する印象がまるではずれたことに嬉しくなった。彼とのふれ合いの記憶はすっかり抜け落ちていたが、中学のころの彼にはかなわないうような劣等感が心の底に淀んでいた。それが六十年近く経って偶然に会うと、小堺にはかなわないうような気持ちはすっかり消えたのである。彼の姿を前にしたとき、憐憫の情が湧いてきたのであった。

小堺は、中学時代は同じぐらいの背丈だったが、いまは頭の分だけ武雄が高い。つむじの周囲が円を描くように薄くなり、側頭に残った髪は白く雪をかぶっている。武雄はなんとなく嬉しくなった。抜けた前歯がさらに老けさせていた。武雄より年上に見えろと思った。風貌全体がみずばらしく、おちぶれた生活をしているように見えた。

「やっぱりそうか」

そう言えば、ベットコーナーで見たような気がする武雄は思った。じつと見られていると感じたことがあった。あれは小堺だったのか。

「奇遇だなあ。お茶でもどう? 時間あるだろ」

小堺は微笑みながら武雄を見つめ、急のため口になった。いまの武雄は誰とも親しくなりたくなかった。人につき合えば、金が必要だし、いくら暇だからと言っても一定の時間を取られてしまう。その時間が充実していればよいのだ

はるかに上流の生活をしているお坊ちゃんだった。小堺の人生に何があったかは想像がつかないが、順当にいったら、市会議員か会社の経営者か教員ぐらいの社会的に地位のある立場にいたとしても不思議ではない。小堺の家は毛織物会社を営んでいたのだ。そのころの繊維業界は隆盛を極めていて、小堺の家も何人かの女工さんを雇っていた。父親は市会議員をしていたし、三次は大学を卒業してから国会議員の秘書までやっていたと聞いている。羽振りのよい家の子どもは、教師にも厚遇されていたのである。

その矛盾を感じながらも、武雄は静かに小堺に従っていた。武雄は学校帰りに、小堺にお好み焼き屋に誘われてよくおごってもらったことを覚えている。武雄がなぜ小堺に誘われたのかいまだに謎だが、背丈が同じぐらいだったことしか思い当たらない。武雄は小遣いなどほとんど貰った記憶がなかったが、彼は羨ましいほどに小遣いを与えられていた。バカにしたような言動もしょっちゅうだったが、彼の気前の良さにつけ入るように、武雄は誘われるたびに彼の子分さながらに従っていた。その最大の理由は、ほかに友だちがいなかったからだ。クラスの皆も、武雄と小堺は友だちだと見ているようだった。とにかく週の三日ぐらいは一緒にいたのだから。

小堺は文房具店に行き、エンピツかノートを買うことがあった。そんなとき彼が購入している間に、武雄に消しゴ

ムなどの文房具を盗むように指示するのだった。武雄が断わると学校の近くを流れる河川敷に連れて行かれ、葦の群生の中でプロレスごっこ称して、羽交い絞めにして投げ飛ばされた。当時武雄は小堺のがっちりした体格の半分ぐらいしかないほど痩せ細り、捕まえられたら簡単に投げ飛ばされていた。そうしてもてあそぶようにしながら、その後で彼は好み焼きをおごってくれたのだった。小堺はいつも金を持っていたから、武雄を自分の慰み物のようになぶって、小さな罪悪感を抱いていたからか、彼に好み焼きをおごって心のバランスをとっていたようだった。もちろん、武雄は面白くない。けれどもプロレスごっこが終われば好み焼きが食べられる。そう思ってた我慢した。ただいじめられるだけだったら、小堺から離れようと自分なりに考えただろうが、そのときは好み焼きを食べられることのほうが武雄には満たされることだったのである。だが、二期が始まって間がない日の昼の放課時間に、小堺が武雄を羽交い絞めにしていて、ところを数人の生徒に目撃されたことがあった。それが教師に伝わって問題になり、やっと武雄は小堺に苦しみられることもなくなったのだった。後から聞いた話だが、彼のいじめとも言える振る舞いは、両親の仲違いが大きな原因になっていたようだった。むしろしゃくしゃくする心を武雄にぶつけていたのである。

「じゃあ、明日、この場所。昼飯でも一緒に食べよう。」

大金が当たって間もなくは、興奮して、眠るときにも換金するときの快感がよみがえってきた。武雄はその翌日から最終日まで競輪場へ出かけていった。もちろんはずれることが多かったが、トータルでその五日間は儲けることができたのである。それは気分がよいことだった。その快感によって、ギャンブルの罠に引かかったのだった。この罠に陥ると冷静さが消えて自分自身を見失う。レースが終盤になって、負けがこんでくると、その負けた分を取り返そうという気になる。残りのレースは二レースしかない。そのころには少額の賭け金では追いつかない。そのため、これまでより多い金額を賭け、しかも配当のよい穴目に託す。そういう欲を出せば、結局負けてしまうのだけれど。だが、大金を得ると、より望みが大きくなった。そして一日に五千元、多いときで一万円賭け金を増やしていったが、やればやるほど負けてしまった。このままつづけるか、やめるか。武雄は我に返ってやめる決意をした。半年余りは負けも少なかったが、それから半年間ほどやりつづけ、気がついたら妻の死亡によって得た一時金を半分以上使い果たしてしまったのだった。そこで冷静になって競輪から足を洗うことができた。それでもまだやってみたいという誘惑にかられるときがある。そんなときは、負けたときのイヤな気持ちを思い起こすようにして競輪に対する情熱を断ち切っていた。

いろいろな楽しい話ができそうだな」

小堺の提案を受け入れて別れた。

小堺はどこに住んでいるのだろうか。裕福な雰囲気はなかった。武雄を誘う理由もわからない。中学時代のようにつき合えると思ったのだろうか。武雄は彼に投げ飛ばされたときの姿がよみがえってきたが、不思議と報復の気持ちも怒りも湧かなかった。彼の姿は、報復を抱かせるほど立派でもなくむしろ憐みを抱かせたのである。

翌日も穏やかな日であった。武雄が約束の場所に行くと、不意に後ろから声をかけられた。

「おはよう、食事にでも行こう」

小堺の足は競輪場のほうに向いていた。駐車場があたりこちにあるが、車は停まっていなかった。開催日ではないようだ。武雄は、競輪で大穴が当たらないかと思う。一か八か一万円が百万円にならないかと思う。これまでの経験上ギャンブルなどで金を儲けることなどできないから、百万円あれば、上手く遊べば二年は楽しめるだろう。

武雄が競輪場に入りますようにになったのは、妻を亡くした傷心を癒そうと始めたのがきっかけだった。そして初めて行ったその日に、十数万円の配当を得たのである。一時でこんなに金を得ることが自分の博才を人に自慢したいほど感激した。運がよければ、競輪で一生生活できる金を得ることだって夢ではないと思った。

そんな苦い思い出を思い起こしているうちに、競輪場の入口近くまで来た。妻の死亡一時金をつぎ込んで、反省してやめて以来、ここには寄り付かなかったのだが。

小堺はどこに行くのだろうと思っていると、入口近くの『大勝利』という大衆酒場に入っていた。だだっ広い空間に薄汚れたような焦げ茶色のテーブルが十卓ほど並んでいる。床はコンクリート。きれいい好きの人間には抵抗がありそうだが、競輪に熱を上げている人間には親しみやすい雰囲気があると武雄は思った。

「いらっしやい、小堺さん、お久しぶり」

店に入ると中年の女性が席に案内した。小堺は相当の常連になっていると武雄は察した。

「ここは月曜休みだから、開催してなくても店は開いているんだ」

小堺はビールと枝豆と刺身の盛り合わせと串カツを頼んだ。武雄は心配になって、いいのかと聞いた。

「何が」

「俺は糖尿病だし、この店、そんなに安くないんだろ」

武雄は誘惑に弱い自分を戒めるため、いつも糖尿病であることを相手に知らせて、無茶ができないと伝えておく。それでないと、医者が言うように、死が早まるような気がしていた。死にたいと思う気持ちが不意に襲ってくるその一方で、生きたいと思うときがあるのだ。

「たいしたことないよ、安いしサービスもいい。俺もどこか悪いと思うけど、医者にはかかっていない。住民健診も受けたことがない。もし悪い所があったら、通院か入院ということになる可能性がある。まあ、自覚症状がないから病気はないとしてるんだ」

「それはまずいんじゃないか」

「大丈夫さ、無茶をしなれば。自分の体は自分が一番よく知っている。……それより我慢することのほうが体に悪いよ。週に一回や二回、自分にご褒美をあげないと駄目になる。何のために生きているという気になったら終わりだよ」

「言いたいことはわかるけど……。よく来てるのか?」

「たびたび来る、じゃないと生きていかれんよ」

「じゃあ、生き甲斐なんだ」

「それほどでもないが。でも、後悔だけはしたくない。人間の命なんて、いつどうなるかわからんからな」

「俺はいま、一人暮らしなんだ。俺の人生設計では、妻より早く死ぬはずだったが、二年前に妻が癌で他界した。一人でも生きる楽しみを持って生きようとしているんだ。小堺君はどうだ。奥さん、元氣か」

「……実は、結婚はしたのだが、半年ぐらいで別れた。四十年もむかしの話だ。それ以来一人だよ」

「じゃあ、お互い一人か」

「いいのか?」

「いや、そうは思わんが。そういう人間もいるということだよ」

そう言ったが、武雄の心に羨ましさと嫉妬心が生まれてきた。が、武雄にとってこうした非現実的な話は自身が追い込まれてゆくような気がして、

「ところで、どこに住んでいるんだ?」と話題を転じた。

「このスーパールの近くのボロいアパートだよ。一人だから気楽でいいけど」

中学当時は繁栄していたようだが、その後、繊維産業は廃って、小さな会社はどんどん倒産していった。小堺の家もそういう道をたどったことは容易に想像できる。いつであつたか、彼が住んでいたあたりの寺に参拝に行ったが、周辺は高層マンションが建ち並び、むかしの面影はすっかり消えていた。その有様からも、小堺は裕福さから遠のいている気がする。

「健康ならいいよ」

「でも齢だから、七十も過ぎれば、誰でもどこか悪いところがあるよ。ないのは、化け物だ」

「そうかな、俺はもう勃たないよ」

「それは気の毒に……。勃たって、人生が変わるわけじゃない。女なんかいなくても、ほかに楽しいことはいくらでもある。まあ、どうしても女が欲しければ、風俗へ行けば

「ああ。でも慣れた。不自由なこともたしかだけど。男はそのようにできていないからな」

「結婚したいと思わないか」

「いまさら、そんなことを考えたことはない。女性が相手になってくれるとも思っているのか。この爺さんにそんなことはあり得ない。この齢になって結婚して何を期待するんだ」

「俺はパートナーが欲しいと思う。妻が生きていたときは、鬱陶しいと思ったこともあったけど、それでもいろいろやってくれたから。何もかも自分でやらなきゃならないのは、しんどい。それに、女つ氣がないのは佐しいよ。だから、猫を飼ってるんだ。可愛いもんだよ」

武雄は、つい本音を漏らした。

「猫が奥さんの代わりか」

「そうかもしれない」

「それじゃあ、いいじゃないか。猫では物足りないのか」

「そら、ちがうさ。中学二年のときの担任の藤波、俺たちの同級生の村井京子と再婚したらしいぞ。奥さんは十年前に亡くなっているらしい」

武雄は同窓会のときに知った話を伝えた。

「それはそれは……。藤波爺さんやるねえ。体育の教師だったよな、たしか。もう八十五ぐらいだろ、盛んなことで。若いころなら、障子紙くらい破ったかもしれないな。羨ま

しい」

「……でも、一人暮らしがこんなに寂しいとは思わなかった」

武雄は、妻との交合がなくなったのは、行為の途中でインポテンツになったからだ。それ以来、インポテンツになる恐怖から妻を求めることはなくなった。むしろほかの女性と交わったこともない。しかし、そのことを深刻には考えていない。相手がいなければいけないで過ぎてゆくことだと思っている。性欲が起きて我慢するのも辛には辛いが、慣れてしまえばそれほど苦しいことではない。ただ誰もいないということを実感すると急に寂しさに襲われることがある。それが辛い。

「そうか。おれは、一人暮らしになったのは、はるかむかしのことだから、いまになっては、そんな気持ちにはならない。とにかく、女のことは忘れるんだ。この世に女はいないものと思つて暮らす。それに代わる何かを見つけ出すんだ。そうでないと死にたくなるかもしれん。……その意味では、競輪なんかいいんじゃないか」

「ギャンブルは、寂しさを解消できないような気がする」

「それはお前の心の問題だな。誰にも治せないかもしれない。でも、医者に相談したらよい答えが出るかもしれない?」

「そこまで深刻ではない。俺は昇華している」

武雄は、しかし自分の言ったことが虚言のように感じた。

小堺は冷や酒を頼み、グラスの半分ほどを飲み干した。
「南条も飲めよ。再会して俺は嬉しいよ」

「よし、今日は俺もどんどん飲むぞ。このごろ、節制して
るんだ。でも、つい飲んでしまふんだ。いくら糖尿病だか
らって、もともと好きだから酒はやめられない。やめよと
言うのは、拷問にかけられるほどに辛いことだ。飲めなけ
れば生きている意味はないと思う。酒こそ生き甲斐だ」

「女以上に？」

「当たり前だよ」

「人間、生き甲斐がなければ、生きていられないが、それ
があれば心配はないな。何か追加で頼むか」

小堺は赤くなった顔を武雄に向けた。

「もう、充分だよ。飲みたければ頼めばいいぞ」

武雄はトイレに消えた。小堺との会話に集中していたせ
いか、二時間余り尿意を覚えずにいた。武雄がもどってく
ると、じゃあ、行かと言った。

「勘定は？」

「今日は俺のおごりだよ」

小堺は残りのビールを自分で注いで、一気に飲み干した。

「いいのか？」

「遠慮には及ばんよ」

武雄は小堺に押されるようにして店から出た。

「じゃあ、三日後、競輪場の入口で、十一時に」

ゆつくりと口に入れると咀嚼して、また口に入れて、半分
ほど食べる。満足げに薄桃色のハムのような舌を延ばして
白い頭や口の周りを舐め回す。三分ぐらいで食べるのをや
めて武雄の前にきて座布団の上に身を横たえた。ジュンは
あまり食べない。もともと食が細い体質のようだ。

「まあ、ええのか。もつと食べやあええに、だから、ちつ
とも太れんのだ。狩りに行っても、負けちゃうぞ」

武雄は、ジュンの背中や頭や首の裏側を撫ぜた。すると、
ジュンは一瞬左右に目を光らせて立ち上がり、ミヤア、ミヤ
アと鳴きながら、胡坐をかいて座っている武雄の左の太腿
に頭を乗せてきた。機嫌は悪くないようだ。

武雄が家を出ると同時に、ジュンも外に出て、勢いよく
走って行った。せいぜい狩りを楽しんで来い。

武雄は途中銀行に寄って、競輪場に向かった。歩いて
三十分。今日は昨日より太陽の光に温もりを感じる。

入口近くまで歩くと小堺が突然現れた。

「よし、今日は儲けるぞ」

小堺は勇んで競輪場の中へ入って行った。武雄が後ろか
らついていくと、じゃあ、後は好きなどころでと小堺は手
を振った。最初のうち二人でいてもレースが始まると離れ
離れになる。二人でいると気が散って勘が狂う。連れが儲
けて自分が負けると惨めになる。はずれることが多いので、
後悔の気持ちが強くなる。競輪は基本的に一人でやるもの

武雄は小堺のおごりが気になったが、久しぶりにまとも
に人と話をしたことに気分をよくしていた。

家にもどって一寝入りしていると、ジュンがもどってき
た。武雄はジュンの器にマグロの切り身を入れてやった。
武雄は昼間の酒のせいか腹が減らず、夕食はお茶漬で済
ませた。

翌日もその翌日も、武雄は『フレンドリー』で過ごした。

武雄は、小堺と競輪場に入る姿を思い浮かべた。途中銀行
に寄り、軍資金をおろす。最低でも一万円を用意しなけれ
ば儲けることはできない。それは、経験でわかっている。
儲かったら小堺に酒をおごってやる。次の開催日にも競
輪を楽しめる。新聞のデータを入れて熟考すれば当た
るかもしれない。彼はレースごとに予想して赤ペンで買い
目を記入した。それは夜の楽しみにもなった。

翌朝、少し寝不足だったが、武雄はいつもより早く起き
た。カップ麺を食べていると、ジュンがミヤア、ミヤアと
鳴きながら寄ってきた。武雄は缶詰のマグロを取り出して
アルミの器に盛る。傍にいるジュンは、入れているさなか
に、器に顔をつつこんで肉片をくわえる。噛みくだきなが
ら肉片を食べる。この猫は子どものころに家で飼っていた
タマよりおとなしいと思うが、マグロの餌を食べるときに
は鋭い牙がむき出しになる。小学生のころに遠足で行っ
た動物園で見たヒョウが鶏肉を食べている様子が浮かぶ。

だ。たまに儲けると人に話したくなるから、仲の良かった
友人との関係も悪化する。人の幸福など聞いて嬉しいこと
などない。

武雄はこのところ勝ちもしないが負けてもそんなにひど
くはない。運勢を見るが、ほとんど当たっていない。無心
にその日のラッキーナンバーが7と3だとして、3番を一
着にして例えば5、8、9を二番という目を選んで、1が
きたり2がきたり7がきたりするのだ。それでも、新聞の
予想にすぎるときが多い。つまり、自分の考えで一着二着
を選ぶわけではないのだ。ただし予想屋にすぎることとはな
い。一度買ってみたが、予想する目が多く、書かれている
買い目をすべて買ったら、回収金額のほうが少なくなつて
しまった。金を出して予想してもらい、それでマイナスに
なつては惨めになるばかりだ。だから、予想屋に頼ること
は止めた。予想屋だつて人間なのだ。これまでの経験では
直感的に選んだ数字が一番当たっているような気がする。
予想屋はおそらく少しは博才が普通の人間よりあると思っ
ているかもしれないが、正業などとは思っていないのでは
ないか。成り行きでなつて、そこから抜け出せなくなつて
しまったのだ。だとしたら、武雄のような普通の人間でも
その気になれば予想屋になれることはないと思う。であ
れば、買い目を予想屋に託すことはバカらしい。

武雄はその日は偶数のレースに賭けた。いずれもはずれ

て、手持ち金は三千円になっていた。この三千円を最終レースに注ぎ込み、これまで投入した金を取り返さなければならぬ。十レースが終わったとき、小堺が武雄の前に現れた。武雄ははずれ車券を破った。

「どうだ、取れたか」

小堺が背後から声をかけてきた。手に半分ほどになったワンカップの酒を持っている。いかにも酒を飲んだという赤い顔をしている。

「さっぱりだよ。これじゃあ、明日も来なきゃいけない」

「あと、いくら持っている？」

「三千円」

「俺はすってんでんになっちまった。南条、悪いけど、千円でいいから貸してくれないか、最終レースに賭ける」

武雄は小堺の目を見つめた。彼はこれまで金を貸してくれと言ったことがない。

「頼むから、貸してくれよ」

呂律が少し回らない。

「わかったよ、貸すよ」

「ありがとう。恩にきるよ」

武雄が千円を渡すと小堺は二階のスタンドに消えた。

武雄は客の中に闇で金を貸して、高額の子利子をとって稼いでいる人間がいるという噂を聞いたことがある。以前武雄が競輪場に来ていたときに実際そういう惨めな男を見た

つも座る椅子は誰も座っていないことが多い。武雄の姿をよく見る人たちは、ここには座らないようにしている気がしないこともない。その椅子は、彼の専用になりつつある。

最近小堺の顔を見ないと思っていると、久しぶりに小堺が顔を見せた。武雄は会ったら、以前小堺がおごりと言った払った飲み代を返すつもりでいた。

「元氣だったか」

「ああ、南条は？」

「俺は相変わらず、ここで寂しく過ごしているよ。病気にでもかかったかと思ったよ。年金も入ったから、飲みに行こう。今日は俺がおごるよ」

「そんなに気にしなくても」

「俺は、借金はいやなんだ」

「『大勝利』の分は、俺のおごりだよ」

十一時過ぎに『大勝利』に入った。

「しっかり飲んでくれ」

適当に肴を頼み、生ビールを一杯ずつ飲んでから、冷や酒を飲んだ。三時間ほど飲んでやっと腰を上げた。武雄は二万円ほど払ったが、小堺におごってもらった分より多く払ったので、肩の荷が下りた感じだった。

このとき、小堺が酔いに紛れて語ったのは、三十年も前に家業は廃業し、借金だけが残ったという悲話だった。工

ことがあった。金を借りたものの返すことができず、雨が降ろうがレースの始まりから終わりまで入口に向かう歩道の端に立っていた男を見たことがあった。その男は見せしめのように、武雄が競輪場に来るといつも手に文庫本を持って立っていた。

小堺が賭ける金額は多くはないと思うが、借金に慣れてしまふとその恐ろしさも感じなくなる可能性もある。小堺はひよつとしたら、軍資金をサラ金から借りているかもしれない。ギャンブル依存症に陥っている可能性も否定できないだろう。中には初めから返すつもりがなく、とんずらして流れて、ちがう場所でもた借りている輩もいるそう。武雄は小堺にもそういう危険性を感じた。

結局、その日は二人とも、所持金を使い果たした。武雄がそのまま家にもどろうとすると、小堺が、やけ酒でも飲みに行くかと誘った。戸惑っていると、

「まあ、まかせとけて。『大勝利』なら、付けがきくから」

武雄は小堺に押されるようにして店に連れていかれた。『大勝利』で一時間余りその日のレースのたればの話をして憂さ晴らしをしていたが、安い肴を二、三品頼んで後はビールを呷るだけだった。かなり飲んだ。この日も、小堺の付けにした。帰り際、明日はどうすると小堺が聞いてきた。ちよつと休憩するよと武雄は帰った。

それから数日間、武雄は『フレンドリー』へ行った。い

場も土地もすべて借金のカタに取られた。二人の兄も消息不明になり、それ以後会ったこともないという。小堺もアパートを借りて建築現場で働いて糊口をしのいできたとのことだった。呂律の回らぬ舌でたらたらと嘆きを伝えてくる小堺からは、家業の隆盛で居丈高に振る舞っていた中学生のころの欠片も見えない。この告白は武雄にとって不快になるものではなかった。彼の中学時代の環境なら、一生贅沢な人生を送っていると思っていたが、それがいまだではどん底に墮ちている。墮ちることに慣れてしまつて、それを恥じらうこともなく語りつづけている。自慢話を聞かされるよりはるかによいが、惨めな話も次第に不快になってくる。小堺の飲みかたは底がなく、酔いが深まると愚痴が多くなった。四十年前も前に離婚してそれ以来一人でいるなら、家庭のぬくもりもろくに味わっていないだろうし、家庭生活を営んだことも忘れたくらいであろう。そう考えると憐れになるが、それを他人がどうこうすることなどできやしない。そうならないように自分も気をつけたいと思うが、武雄も助け舟を出すほど恵まれていない。

「南条、おまえ、俺を恨んでいないか？」

「どうして？」

「どうしてって。中学のころ、おまえをいじめたよな。それを申し訳ないと思っているんだ」

「なんだ、そんなむかしの話、忘れてしまったよ。それに、

大人になってからのほうが、いろいろあつて苦勞したから」
武雄はそう言ったが、彼の言葉に釣られてあのときのことがよみがえってきた。

「あのころ、親父が外に女を作つて、親父とおふくろが喧嘩ばかりしていたんだ。景気はよくて、金には不自由しなかったけど」

その苦惱を俺に当たり散らしていたのかと武雄は思ったが、いまさらそれを言つたとてどうにもならないことだ。

「小堺、俺はお前に感謝しているんだ。声をかけてくれて、有難いと思つているんだ。俺も女房に先立たれて、一人暮らしだから」

武雄は小堺と一緒にいるうちに、不意に寂しさに襲われることがなくなつたと感じていた。小堺と頻繁に会つていると一人であるという孤独感も薄らいでいた。

「おまえといふと寂しさがなくなるんだ」

「そうか、俺でも役に立つことがあるんだな」

「友だちさ」

うとうとしてしているとジュンが鳴いた、と思った。武雄は万年床から目を覚ました。昨日の昼に小堺と飲んだ酒が残っているのか、体に熱が溜まつたようにほかほかする。こんな日は外の空気を吸つて気持ちを入れ替えるに限る。武雄は散歩に出ようとジャージに着替えた。そのとき、

インターフォンが鳴った。誰が来たのだろうか。老人クラブ

の勧誘か自治会長か。ここ数か月訪問者などいない。四月に老人クラブへの入会の勧誘に会長の前田が訪れただけだ。

訪問者にろくな奴はいない。武雄は途端に機嫌が悪くなつた。一人暮らしに慣れたから、寂しくもないし、助けても

らうようなこともない。そんな平穩な日々を送っている人間の所に何の用で来るのだ。せつかく一人暮らしの自由を

謳歌しているのに、気分が悪くなるではないか。またインターフォンが鳴った。出ようかどうか迷つた。出て

いかなければまた来るのではないか。南条さん、南条さんと呼ぶ声が聞こえた。この声はお節介の横綱だ。名前は思

い出せない。今度は、武雄さ、武雄さんと一段と大きな声で名前を呼ぶ。いかにも親しそうに呼ぶが、ろくに話をした

ことがない者でも、そうやって呼んで警戒心を解こうという人間もいるから気をつけなければいけない。武雄は顔の

分だけ扉を開けた。

「なんぞ、やつてりやうたか？」

出ていかなないようにしてただけだ。そのしつこさに根負けしたんだ。

武雄の前に額が禿げあがつて大柄な男が立つていた。見たような顔だが、名前は思い出せない。七十歳ぐらいとみた。そんなことより、自分の身分を名乗れ、この失礼千萬な出っ歯野郎。上の前歯の歯並びが良く妙に白い。丸出し

ら

北川は武雄を見つめた。武雄はつづけて、

「困つたもんです。いつになつても金にまつわる欲は衰えないようですな」

そう言いつつも、武雄は北川のペースにはめられていると思つた。彼は帰る気配を見せない。

「とにかく、まあ、気をつけてちょうだあよ」

用は済んだんだろう。だったら、とつと消え失せろ。

「どうですか」

「何が」

「寂しくなあーかも。公民館で毎週集まつて茶話会をやつとるで、よかつたら顔見せてちょうだあ」

いらんことを言う奴だ。やつぱり、居留守を使うべきだった。こいつはたしか一度市会議員に出た奴だ。そのことを会話の途中に入れる。二期目に落ちたことは一言も言わな

いくせに。

「……」

「毎週月曜日の午前中に、お茶を飲んで、いろいろ話して、ふた月に一回カラオケに行つたり、年に二回、暑氣払いと忘年会をして楽しんどるで。みんな楽しみにしてりやうすでねえ。最初は十人ぐらえたつたけど、いまは二十人にもなつとるでな。金もいらんし、ストレス解消にもなるでな。みんなとがやがやつとりやあ、寂しさが解消され

なのでよけいに笑つているように見える。笑いながら怒るお笑い芸人を思い出して武雄は笑みを浮かべた。

「いや、別に」

武雄はつい出ている前歯を見つめてしまった。男は武雄の視線を意識して、一瞬、顔が曇つた。機嫌を損ねた顔になり、舌打ちをした。そしてやおら上着のポケットからマスクを取り出してはめた。

「民生委員の北川ですが」

北川はすぐに気持ちを切り替えたように笑顔を見せた。

「元気でやつてりやうすか？」

武雄は無言で北川を見つめた。万が一この男にコロナをうつされたらと思ひ、慌ててマスクを付けた。

「最近、あのお寺の前の古田さんどこに、変な電話があつて、もう少しで詐欺にあつたことだったでな。気をつけてちょうよ」

古田？ ああ頑固者か。あんなケチ臭い奴が普通に生きているのが不思議だ。

「あの人は、ええ人だけど、まんだボケとらんで、被害に遭わなんだけど。振り込め詐欺に引かかる老人がおらつせるで。ある地区で、三百万円も取られた人もあるで、こ

るわなも」

どうせ意地の悪い老人の集まりだろう。その代表がお前じゃないか。人の気持ちも読めないような男が民生委員なんてやっている。人格、識見の優れた者がやる役ではないか。名誉職と思っているようだが、民生委員はボランティアだぞ。自分の図々しさに気づいていないこんな鈍感な老人が、民生委員になっているとは、どういう人材に乏しい地域なんだ。

武雄が背を向けると、男の目が背中中に張りついたような気配がした。

「これからますます寒なってくるで、くれぐれも体に気をつけてちょうよ」

それがお節介だと言うんだよ。

北川はゆつくりと背を向けて帰って行った。

北川が勧めた集まりには、五年ほど前に当時の老人クラブの役員に勧められて顔を出したことがあった。井戸端会議みたいなものだ。そういう所で、威張りたい人間が世話役になって会が進んでゆく。それは武雄がもつとも嫌うことである。武雄とはウマの合わない輩が必ずいるに決まっている。そんな人間とは顔を合わせたくない。合わせないほうが心の健康のためによい。老後はそれこそジュンのように何にも縛られず自由に過ごしたい。そう思っ、退職してからのその種の勧誘を断りつづけてきた。だから、武

るときは、スパーや公園へ出かけて心を鎮めようとしていたが、それが減った。ゴロゴロ気持ちよく喉を鳴らしているジュンを抱いて寝ているほうが心は癒される。

武雄は、カツオの切り身を食べてから出て行ったジュンを待っていた。狩りに行ったのだろう。いつもなら二時間ほどでもどって来るが姿を現さない。子どものころ家で飼っていた猫は、最後は、どれも出て行つては帰って来なかった。祖母が、猫は自分で死ぬときがわかるのだらう、だから飼い主に死ぬ姿を見せないために帰ってこないと言っていた。武雄はそれを信じていた。嫌な予感がしたが、ジュンはきつと帰ってくると思直した。武雄は、アジの干物を買ってきて半分ずつ食べようと思う。武雄が外出しているうちにジュンが帰ってくる可能性もある。武雄は、器にマグロの切り身を入れて置いてやった。いつでも収穫があるとはかぎらないし、そんなときは腹を空かして帰ってくるだろうから。

武雄は、『フレンドリー』へ買い物に出かけた。ジュンの餌が無くなりそうなのが気になっていたのだ。それに七時を過ぎたころ、食糧や弁当が半額になる。それを知っている、この地にきている東南アジア系の若い女の子や主婦が売り場の周りをうろろするから売り切れてしまう。半額や三割引にするシールを張る時間を見計らっているのだ。武雄もその夜と翌日の昼食を賄うつもりだった。こう

雄はいまの平穏な日常が保たれていると思っっている。

ジュンが、ミヤアと鳴いてサッシの戸の近くを右に行ったり左に行ったりしている。時々武雄を見ながら体を伸ばして何度もサッシ戸に足を持たせかけている。戸を開けてくれという合図だ。

「外に行きたいか、よしよし、待つとれよ」

武雄はサッシ戸を少し開けてやる。ジュンは勢いよく外へ出ていった。どこへ行くかは知らないが、毎日行く場所があるようだ。

武雄が外出するときはいつもジュンが部屋に入つて来られるように十センチ余り開けておく。寒い日や雨の日は締めたままにしておくが、もどって来ると鳴いてそれを知らせるので心配はない。ジュンが外へ行って夜になつても帰らないときは心配になつて家の周囲を探しに行くときもある。武雄はジュンと一緒にいるうちに、寂しい気持ちが癒えたような気がしている。老人クラブの加入を誘われても断っているのは、孤独に生きるよりストレスが増える気がするからだ。寂しさは大勢の中にも襲ってくる。ならば、つき合いをしないほうがよい。以前は不意に寂しさに襲われることがあつて、そんなときは老人クラブに入つて行事に参加してもよいという気持ちになることがあつたのだ。それがジュンを飼うようになってからはなくなった。一日中、ジュンと家の中で過ごすことも増えた。一人でい

いう買い物は貴重だ。食事はなるべく安い物を求めるのは当たり前なことだ。しかしこれも、歩けるからできることだ。もし、要介護状態になつてホームヘルパーでも頼むことになつたら、それはそれで制限があるだろうしどんなものでも買い物してくれるわけでもないだろう。買い物は楽しみの一つになっているのだ。叶うことなら美香たちがこちらに来て同居してくれればと思うが、千葉にも一人暮らしをしている夫の母親がいるので、それもできない。母親は七十九歳だそう。武雄が美香の家に入居する方法もちらつと考えたが、この家を出るといふ気にはなれない。そんな身勝手なことを持ちかけても困るだけだろう。周囲を見てみると、在宅生活が無理になつたら介護施設に入っている人がほとんどである。施設に入所していない人は、息子夫婦と同居していても、離れに一人住んでいる。一人暮らしをしていても、同じ敷地内にいるから、いざとなつたら助けを求められる。一人の生活が限界になれば、息子の意向が働いて、施設入所になるだろう。ただ施設入所になれば、相当の費用がかかるから、金がなければ最後は生活保護に頼るしか仕方がない。武雄の住む家の敷地は九十坪であり、家屋は四十五坪の木造二階建てである。これを売りに出そうとすると、家は処分料が必要で、差し引きすれば一千万円にもならないだろう。こういうことを考えていると不安ばかりが膨らんで機嫌が悪くなる。せめて寝たき

りにならないように、健康に留意しなければならない。娘の美香はいないものとして生きていなければならない。頼ることを捨てなければいけない。

家にもどると、ジュンがミヤア、ミヤアと鳴きながら武雄の所まで歩いてきた。彼は直感で、いつもと雰囲気がちがうのを悟った。家を出るとき、ジュンが入って来られるぐらいに戸を開けておいたはずだが、その倍以上に開いているのだ。誰か入って来たか？ 不審に思ったが部屋が荒らされた気配はない。よその猫でも入ってきたか。それにしても広く戸が開いている。それに器に盛ってあったマグロの切り身がきれいになくなっていった。ジュンはよほど腹が減っているのだろう。ミヤア、ミヤアと物欲しそうにすり寄ってくる。

「腹が減ったか。待つとれよ、いまあげるから」

武雄は、器にマグロの刺し身を盛った。魚の美味いと評判の店で、マグロの中トロと赤身と頬肉を買ってきた。三千円もしたが、たまにはこういう上等な食べ物を食べさせてやりたいと思う。家計が苦しくなれば、自分が値の張らないものを食べれば済むことだ。ジュンは、いつもの食べ物とちがっていると感じたのか、がつがつとそれを食べた。こうやって食べてくれると武雄は嬉しい。

それから二日後。どんよりと曇っていたが、少し気温は

するとやっと眠りがやってきた。

翌朝、彼が病院を訪れたときには、ジュンはすでに彼岸に旅立っていた。武雄は人目もばからず号泣した。どうしてあの日家にいなかったのか。自分が家にいたらあんな目には遭わなかったはずなのに。武雄は自分を責めた。が、もうどうしようもない。わずか一年余の生活だったが、武雄の心はジュンに癒されていたのである。このごろ弱気になっっているのか、こんな悲しみは妻が息を引き取ったときにも湧かなかった。妻がいなくなると時折寂しいと感じることはあるが、妻の死によって涙を流したことはなかった。武雄はその日、門の近くの蠟梅の下にスコップで穴を掘り、そこにジュンを埋めた。ありがとう、ありがとうと言いながら土をかぶせてゆくと涙がとめどもなく流れた。

背中にも重しでも載せられたような疲労を感じた武雄は、布団に横になってジュンのしぐさを思い浮かべた。ジュンは幸せだったのだろうか。どこで生まれ、飼い主がいたかどうかは分からないが、少なくとも武雄の家に来たことは幸運だったと言える。涙が出る。どうしようもない寂しさが襲ってくる。それを鎮めようとコップ酒を続けざまに二杯飲んだ。そうするとやっと寂しさが治まった。

それから数日、武雄は布団に入っても眠られず、眠る前に酒を飲んだ。飲むと眠ることが出来た。ジュンが、ミヤア、ミヤアと彼の腕の中に入って来た。彼はよしよしとジュ

緩んだ。武雄がスーパから帰ってくると、ジュンが首のあたりから血を流し、器の近くで仰向きに倒れていた。同時に器の奥に光っている四つの目玉と目が会った。二匹いる。タスキかと思った。が、すぐにアライグマだとわかった。武雄は部屋の脇に立てかけて常備してあった護身用の木刀を取り出して、アライグマ目がけて振り回した。叫び声を上げながらがむしゃらに獣を目がけて木刀を振り回した。アライグマは必死になって逃げて行った。武雄は、先日いつもと違って器の中身がなくなっていたのは、アライグマに食べられたからだと思いついた。そのアライグマと戦ってジュンは負けてしまったのだ。ジュンの顔も胴体も傷だらけになっていた。これは人間にやられた傷ではない。腹部にも傷があり、血のおいがする。横になってかすかに体が上下している。ジュン！ ジュン！ と呼んでも鳴く力も起き上がる力もない。

武雄はジュンをバスタオルに包んで毛布にくるみ、タクシーを呼んで『フレンドリー』の近くの動物病院へ連れて行った。医師は、首を傾げ、内臓をやられていますと憐れむような顔を武雄に向けた。入院してもらって、治療しましょうと言った。武雄はよろしくお願いしますと病院を出た。イヤな予感がして夜なかなか寝つけなかった。こんなときは、酒を呷って眠りを呼び寄せる。酒を控えていたのだが、彼はつづけざまに冷や酒をコップに三杯飲んだ。

ンを撫でながらあやしていたが、目覚めたときにはいない。夢かとつぶやいた。ジュンはもういないのだ。すると急に寂しくなって酒を呷った。そんな日が数日続いた。

ジュンが死んで一週間過ぎた日、武雄は『フレンドリー』に行った。二週間ほど前に競輪場へ行ってから、小堺の顔を見ていない。あのとき武雄はかなり抑えて、レースを見ただけで賭けることはなかった。小堺は入口で顔を見ただけで、どうだったか知らなかった。武雄は、その日夕暮れまで『フレンドリー』で過ごしていた。

その翌日、一週間ぶりに小堺から競輪に誘われた。競輪場は活気がある。その雰囲気は煽られて、前日にマイナスでも今日こそはという気持ちになる。顔見知りになって話しかけてくる、いわゆる「競輪友だち」もできた。彼らは名前も何もわからないが、競輪場の中だけの友だちであり、競輪以外のことを話題にすることもない。同類という仲間意識がある。が、油断は禁物だ。警戒しなければいけない人間たちである。親しくなると金を貸してくれと言ってくる輩がいる。馴れ馴れしく話かけてくる者とは話をしないほうがいいと武雄は思う。

その日の武雄は、一番と二番を当てる二連単ばかりを購入入していたが、まったく当たらなかった。レースが荒れ気味で本命で当てようとする堅実派には厄日だった。ギャン

ブルの神様はそっぽを向いているかもしれないが、挽回のチャンスはいつでもあると思う。武雄は思い切って中穴の目を買った、運よく二万円の配当金を得た。

小堺はそれまで当たらずにいたようだった。小堺は失った賭け金を取りもとそうと必死になっていたが、今度こそと勝負に出たレースも当たらずに終わってしまったようだった。武雄は小堺が最終レースを取りたいとせがむので、一万円を貸した。が、そのレースもはずれたようだった。武雄は、最終レースが終わって出口で小堺を待っていたが、彼は姿を見せなかった。

小堺と会わなくなって二週間以上経っていた。電話をかけても不通になっていた。まさかとは思うが、小堺は初めから踏み倒すつもりでいたのではないかと疑念を抱いた。いつも彼から電話がかかってきて、競輪に行ったり飲みに行ったりしていた。最近では誘われてもなるべく断るようになっていたが、彼はよく誘ってくる。断るとすねるので時々つき合うこともあった。そう言えば、このところ武雄が電話をかけても通じたことがない。

武雄は、『フレンドリー』へ行こうと思った。いつもの長椅子に座っていれば小堺は現れるだろう。そこが一番会える確率が高い。

玄関の扉に鍵をかけていると、おはようございますと北

川が立っていた。

「何か？」

「南条さんは知っておられると思うんですが、あんな、小堺という人と友だちらしいなも」

「ええ、同級生ですが」

「その小堺さんが、昨日、K川の河川敷で、車の中で、死体で発見されたこと知ってみえるかね」

「えっ！……知るはずないですよ」

北川は、探るような目で武雄を見た。が、歯が出ているので穏やかな表情に見えてしまう。自然に笑いそうになった。笑ってこいつのプライドをへし折ってやろうかと一瞬思ったがこらえた。こういう人間は、へたな理屈よりも、単純な幼稚な戦法で向かって来られるほうが打撃は大きいだろう。武雄はそう思っているが、それほど冷たくはない。「よく競輪場で一緒だったということでしたので、知っておられると思っただけ。……警察が事情を聞きに来なかったかね」

「小堺さんは同級生というだけです。深い付き合いはないありません。なので、警察なんか来るはずがないですよ。ええ加減のことを言ってみてはいませんか」

「……何がええ加減なことですか。小堺さんの地区の担当の民生委員さんから昨日会議で聞いたことです。今朝の新聞にも出ておったで、知っておられると思っただけ。借

金まみれで、どうしようもなかったということだがね、なるべくしてなった感じだね」

「そんなことを言ってる。あんな作り話をしとるんじゃないのか。えっ、彼があんなに迷惑をかけたのか。民生委員が野次馬根性を出してはいかんと思いますよ」

急に黙ったと思つて北川の顔を見ると目が合った。北川の顔がみるみるうちに赤くなった。

「何が、野次馬だ。心配して来てやっただのに、ひねくれて」

この男はよけいな一言が多いし、相手を見下げたような言いかたをする。武雄は動物的になっていると自覚したが、それよりも北川のほうが動物的になっているように思えた。

「何だと。世話を焼くのもええ加減にしてくださいよ」

「なんだ、その言いかたは、こっちはあんなのことを思つて言っているんだ」

北川の大きな声が背中中で吠えたが、逆にその言葉に怒りの炎が燃え上がり、

「それがウザいんだよ、とっとと消え失せろ！」

武雄は、そう言い捨てて借金取りから逃げる男のように足早に庭から出て行った。

武雄はコンビニで新聞を買い、『フレンドリー』の長椅子に座って早速地方版の紙面を広げた。

「K川の河川敷で、車の中から……遺体を散歩中の人が見つけ、……小堺三次さん（七十三歳）と判明。死後、二日

以上経っていると見られ……、警察は自殺とみて……」

小堺が死んだ、と武雄はつぶやいた。

武雄の脳裡にK川の河川敷に広がる枯れた芒の群生が浮かんだ。中学のころ、武雄は小堺とそこへたびたび行っていた。何をしに行ったかは記憶にない。小堺につき合えども言われたのだろう。芒の薄茶色の群生の先に鮮やかな青い川の流れて水色の空が浮かぶ。

武雄は、民生委員が遺体は斎場の霊安室にあると言っていたことを思い出し、明日にでも、線香を上げに訪れようと思つた。

（「季刊作家」100号より転載）



祖父江次郎

そふえ じろう

1951 愛知県生まれ

69 年高校卒業後

2013 年まで地方公務員として就労

92 文芸同人誌「季刊作家」同人

2013 より 文芸同人誌「季刊作家」

代表、現在に至る

青山墓地の桜

萩原紫香^{しこう}

私は出身を聞かれるとき、東京の麻布生まれで麻布育ちと答えると「あら、じゃあお嬢様だったのね」と言われることが多い。

確かに麻布は現在、都会的で華やかなイメージがある。芸能人や、著名人らが集うお洒落で洗練された街のイメージは、戦争からずいぶん経ってからのものだ。戦争直後の街はまったく違っていた。今で言う西麻布から六本木にかけての街の雰囲気はイメージする人は、あの戦後の昭和二十年代の麻布界隈の環境を知らないからだろう。遙か昔、

混沌としたもう一つの別世界が存在していたことを……。

あの頃青山墓地の下から、当時は竜土町と呼ばれていた現在の六本木ミッドタウンが建つ辺りまで、多くのアメリカ兵が駐在していた。進駐軍の連隊があつたのだ。

そこは、二メートルを超えるほどの有刺鉄線で囲まれており、一般人は出入りが出来なかった。

閑静な住宅街をアメリカ兵が闊歩している姿は、場違いに映ったが、何処で覚えたのか子供たちは彼らが通ると競うように「ハロー。ハワユー」と声を掛ける。すると若いアメリカ兵が「ハロー」とウインクをしたり、頭をなでたりして、ポケットから手品さながらに、キャンディーや、

シュガーやチューインガムなどを出して当時珍しいお菓子を与えた。

子供たちは嬉々として「サンキューベルマッチ」と怪しげな発音で、オズオズと手を伸ばしていた。

アメリカ兵から見たら、敗戦直後の貧しいけれど無邪気な日本の子供たちに、少しでも施しをしていたつもりなのだろう。

そしてアメリカ人相手の女性たちも数多く存在していた。現在のようなアパートなどと気の利いた建物はなく、民家の二階だとか、部屋数の多い家では一部屋とか、お屋敷の離れとかを、彼女らに間貸していた。

そこで夫婦気取りでハズバンドと称する米兵との利他的な愛の暮らしを送っていた。

彼女たちは、「日本人妻」とか「オンリー」とか呼ばれていた。

その女性たちの大方が妊娠しており、既に子供がいる人もいた。

その中で、帰国する米兵とともにアメリカに渡り、正式に結婚が出来た恵まれた女性ほどのくらいいたのであろうか……。

大半は子供の有無にかかわらず、その場限りの関係で任務が終われば母国に帰って行った米兵の方が、遙かに多かったのではないか。

幼い私の記憶には、映画やテレビで観るケバケバしく下卑た退廃的な女性はいなかった。

彼女たちは、明るく常識的で、中には知的な雰囲気さえ漂わせている女性もいた。

だからというわけでもないだろうが、周りの大人たちは、陰ではパンちゃんとか、パンスケとか蔑んでいたが、表面上は案外平和に共存していた。

戦火から逃れることのできた六本木界隈は静寂なお屋敷町と、子供たちが賑やかに群れている庶民の家と、外人が醸し出すお洒落な感覚、そして彼女たちの活気に満ちたすべてが、混然と溶け合った独特な雰囲気的地域だったのだ。

二

当時、私はまだ幼稚園に通う五、六歳の子供だった。その頃、我が家にはハナという名の大きな雑種犬がいた。ハナは賢くて、優しい性格だった。

私はよくハナの散歩に祖母と青山墓地に出掛けた。私が鎖を握っていると、ハナは私を守るように、私の遅い歩調に合わせてゆっくりと歩いていた。墓地に着くと、墓所を抜けて、緩い勾配の土手の所でハナを鎖から解き放す。

ハナは自由になって喜び勇んで飛ぶように駆けずり回っていた。

「ハナ」と呼ぶと、遠くから駆け寄り顔をペロペロ舐め、

また飛び去っていく。その度に私はキヤッキヤツと笑い、祖母は夢中で土手に芽吹いているヨモギを積んでいた。土手の下を時々、四ッ谷三丁目から品川駅区間を走っている都電が通り過ぎていく。

丁度私たちがいる場所がカーブになっていて、そこでも土手の向こう側は、雑草が生い茂った有刺鉄線が張り巡らされている連隊駐屯地だった。

そんなハナに、いつの間にか友達ができた。ペスと言う、真つ黒な小型犬で、ハナの野太い声とペスの甲高い鳴き声が混ざって、二匹は連れ合うように、はしやぎ回っていた。

そして隣にはペスの飼い主である、優しい綺麗なお姉さんがいた。私はお姉さんの名前も知らないし、今では顔も思い出せない。ただ、子供心にとっても綺麗な人という記憶だけが残っている。

お姉さんは土手にたくさん咲いている蓮華の花で、首飾りや冠を作ってくれた。私もおぼつかない手で教わりながら、冠を作り、お姉さんの長い黒髪に被せた。「わーっ綺麗、お姉さん、お姫様みたい」

私の言葉に「ありがとう和美ちゃん、お姉さんの宝物にするね」と嬉しそうに言ってくれた。

中には赤い絨毯が敷き詰められて、大きなダブルベッドが占領していた。

その横の小さなテーブルで、お姉さんは手作りの卵サンドイッチと甘い紅茶でもてなしてくれた。

私はサンドイッチを一口食べて「こんな美味しいもの初めて食べた」と思わず叫んだ。私の嬉しそうな顔に、お姉さんは「和美ちゃんが好きなならいつでも作って上げるわよ」と笑顔で答えてくれた。

今と違って、卵は贈答品に扱われていたくらい貴重で、木の箱の中で丁寧に包まれていたのだ。

祖母は、帰ると早速母に「まったく、あんなベッドの横で目のやり場に困ったわよ」と言っていたが、その後、足し繋げく通うようになった私は、そのベッドの上で、ピョンピョン跳ねたりゴロゴロ寝転がったりして、お姉さんに幼稚園での出来事や、意地悪な男の子の話などをしていった。私がいつ行っても、お姉さんとペスはとても歓迎してくれたのをいいことに、幼稚園から帰ると飛ぶようにお姉さんの家に通った。

一度だけお姉さんのお相手に会ったことがある。茶色がかった金髪で、ブルーの瞳が透き通るように素敵で、王子様のような人だった。

お姉さんが「いつも話しているお友達の和美ちゃん」と言うと「コンニチワ、ヨロシクネ」とたどたどしい日本語

ある日、お姉さんは英語で文字が書かれている綺麗な模様の丸い缶に、クッキーやチョコレートを詰めて持ってきてくれた。

その缶を貰った時、私はまだ幼かったのに、彼女がどういう立場の女性か察しがついた。

祖母は家に帰ると母に「あんなに上品で綺麗な人がねえ……どんな事情があるのか知らないけど、ほんとに戦争は残酷だねー」と、ため息交じりに言っているのを、貰った缶からチョコレートを取り出して食べながら聞いていた。

お姉さんの家は、驚くほど近くだった。

近所の古い屋敷が建ち並ぶ中でも、取り分け広い敷地のお屋敷で、庭に大木があり、夜更けになると、大木からホーホーと梟の鳴き声が聞こえてきた。

その鳴き声が、子供心にとっても不気味で、いつも隣に寝ている母にしがみついていた。

その梟の森の離れ家にお姉さんは住んでいた。離れと言っても、路地に面して木戸がありそこから自由に出入りが出来る孤立した家だった。

最初は祖母と、ヨモギで作った草だんごを持って行った。貴重な小豆に父が進駐軍から闇で買ったとかいうお砂糖をふんだんに入れた甘いあんこでくるんだ草餅だった。

お姉さんの家は木立に囲まれた古い家だったが、部屋

で挨拶して、屈んで頬つべたにチュツとしてくれた。

私は恥ずかしいのと嬉しいのと、こそばゆいのとで、顔をクシャクシャにして肩をすくめて、お姉さんを見上げた。お姉さんはそんな私を見て彼と顔を見合わせて二人で楽しそうに笑っていた。

今思うと、その頃の彼女が一番幸せだったのかも知れない。

私が、持病の小児喘息で寝込んでいる時には、卵サンドと、英語で書かれている果物の缶詰を持ってお見舞いに来てくれた。

「早く良くなって、また遊びに来てね」

お姉さんは、私の頬を撫でながら優しい声で言った。その冷たくてしなやかな手が、まだ熱のある身体に気持ちよかった。

こうして少しの間、お姉さんと私の家族は交流を持ったのだった。

三

その頃から、お姉さんのお腹が段々と目立ち始めているのに気づいた。

「お姉さん赤ちゃん生まれるの?」

祖母に聞くと「そうみたいね、だけどお姉さんには言っては駄目よ」と言われたので、聞いてはいけないことなの

だと、幼いながら納得した。

相変わらず、私のお姉さんの家通いは続いていた。

そんなある日、ベッドでゴロゴロしていると、洗濯物を取り込んでいたお姉さんが「和美ちゃん、遠くで雷が鳴っているし、今にも降りそうな空だから、今日は帰った方がいいわ」

今ならその時のお姉さんの心遣いが痛い程分かるのに、子供心に帰った方がいいと言われた一言が気に入らなかったのか「嫌だー、帰らない」とぐずり始めた。

「じゃあ、お姉さんが急いで卵サンド作ってあげるから、お家でお食いなさい」

私は、そんな気遣うお姉さんに急に意地悪がしたくなった。いつも優しく微笑んでいるお姉さんを泣かせたいような、何故かそんな衝動に駆られたのだ。

台所でサンドイッチを作っているお姉さんの背中に向かって言い放った。

「お姉さんの生まれて来る赤ちゃんって、あいの子なの？」
今ではハーフとか、もてはやされているが当時はあいの子と呼ばれて、差別されていたのだ。

一度禁句を破ると、堰を切ったように言葉が出て来た。

「お姉さんは、パンパンガールなんでしょう？ パンパンガールっておもしろいの？ 私も大きくなったら、パンパンガールになる」と、パンパンガールと連呼しながら、ベッ

ドの上でビヨンビヨン跳ねまわっていた。

お姉さんは、私の憎まれ口をまったく無視して、いつもの優しい声で「はい、出来たわよ、おまけに和美ちゃんの好きなアップルパイ一切れ入れておくからね、お家で召し上がれ」

綺麗なナプキンで包み、その上から花柄のハンカチーフで、二重に包み込んでくれた。

「ハンカチーフは、和美ちゃんに上げるから、返さなくてもいいわよ。また明日遊びにきてね」

何事もなかったように微笑みながら言った。

私はどのようにして帰ったのか、どんな気持ちでサンドイッチやアップルパイを食べたのか、その後の綺麗なハンカチーフの行方も、まるっきり記憶に残っていない。

四

そのあくる日から私はお姉さんの家に行かなくなった。子供心の気まぐれで、もう厭きたとしか言いようがなかった。それからしばらく経ち、友達と道端で遊んでいると、大きなお腹を抱えた大儀そうなお姉さんが通りかかった。手には、お風呂道具一式を風呂敷に包み持っていた。あの頃の銭湯通いは、金物の洗面器に石鹸やタオル、着替えの下着などを風呂敷に包みけつこう大荷物だったのだ。

「あら、和美ちゃん、お姉さんこれからお風呂に行くけど、

一緒に行かない？」
優しく声を掛けてきた。

「私の家、お風呂があるから行かない」

素気なく断った私に「そうだったわね、また遊びに来てね」

私はその優しさがなぜか無性に腹立たしくなり、友達に聞こえよがしに言った。

「あの人パンパンガールなのよ」

「へえーじゃあ生まれてくる子はあいの子なの？」

私は黙って頷いた。

そんな会話を交わしながら友達と遠ざかるお姉さんを見つめていた。

聞こえないはずがなかった。

大好きな人を傷つけてしまった……。

いじめっ子が、好きな女の子を泣かしたい衝動的な気持ち……。その時の心境は、まさにそうだったのだろう。

私がお姉さんを見たのはその日が最後だった。

一週間ぐらいい過ぎた頃、遊び疲れて帰って来ると、庭でハナとベスがじゃれ合っていた。

「えっ、お姉さん来ているの？ 赤ちゃん生まれたの？」

私は、てっきりお姉さんが赤ちゃんを見せに来たのかと思った。

母が腫れぼったい目で祖母と顔を見合わせて「お姉さんは、遠くに行ったのでベスは家で貰ったの」と鼻を吸りながら言った。

「へえーじゃあアメリカに行ったんだー、アメリカで赤ちゃん産んだら、あいの子じゃないものね」

私はそう言うと、尻尾を振りながら近づいてきた二匹の頭を撫で、ボールを持って何事もなかったように庭に出ていった。

五

私の中ではその日から、お姉さんの記憶は消えていた。消えるというより、胸の奥深くへ眠っていったのだろう。

昭和三十年代に入り、戦後から立ち直った日本は高度成長期に入り、急速に時は流れていった。

米軍基地は返還され、アメリカ兵が少なくなるにしたがつて、彼女たちも三々五々と散って行った。

六本木周辺も、米軍相手のお洒落な店はそのまま、若者が群がる店となり、間もなくしてテレビ局も開局して芸能人たちが集まり出し、六本木も大きく変貌していったのだ。

私が高校に進学した夏に、ハナが死んだ。

そして、ハナを追うようにしてベスも旅立った。

その時に、祖母が「ベスや、お前の前のご主人が迎えに来たんだねー」と言った。その一言は衝撃だった。

「えっ、お姉さんアメリカに行つたんじゃないの？」
私の問いに、祖母は少し気まずそうな顔をしたが、あな
たも大きくなったのだから、ほんとのことを知ったほうが
いいわね……と語り始めた。

お姉さんは、アメリカに帰った彼が、両親を説得して必
ず迎えに来ると約束したのに、臨月を迎えた頃に、「両親
に反対されたのでこれまでのことは終わりにしてほしい」
との手紙が届き、将来の不安と絶望感で死を選んでしまっ
た……。

青山墓地の桜吹雪の中で、桜の枝に彼の愛用していたネ
クタイを回して、地面すれすれに垂れて縊死していた。胎
児は母体から半分出掛つていたそうだ。

金髪のうぶ毛の男の子だったと言う。

そして、お姉さんの頭には萎れて変色してしまった蓮華
の花の冠がピンでしっかりと留めてあったと聞いた……。

そばに繋がれていたベスが、異様な鳴き声だったので墓
地の管理人が見つけたそうだった。

お姉さんには身内の人が見つからなかったために胎児と
ともに無縁墓地に葬られた。ベスは保健所に連れて行かれ
たのを、祖母が聞いて慌てて電話を掛けて引き取りに行っ
た。祖母はそれまでの経緯を、彼女が住んでいたお屋敷の
人が「お宅のお嬢ちゃんがよく遊びに来ていたの」と、
知らせてくれたと言った。

んなさいと私は何度も叫びながら泣き崩れていた。

お姉さんに対して幼い私の言葉や態度は、母や祖母には
到底言えるものではなかった。

その日から私は青山墓地に行けなくなった。

だが、私はお姉さんを傷つけてしまった愚かな自責から、
なんとか逃れられることが出来た。

現実には皮肉なもので、悲しみを乗り越えるのには、それ
以上の悲しみに襲われることだと初めて知った。

その秋、父が心筋梗塞で急逝したのだ。夜、おやすみと
言って寝床に入り、朝はもう息がなかった。

身近な肉親の死に、茫然自失となった。

その後、高校最後の年で大病を患い、三カ月余の入院生
活を送り、大学進学は諦めた。

家で就職もせずぶらぶら過ごしていたが、お姉さんの記
憶は諸々の日常生活の中で埋もれていた。

私は二十一歳で、知人の結婚式で知り合った男性と結婚
して、隣県に移っていった。

祖母の死をきっかけに、母は麻布の家を処分して、高輪
のマンションに一人住まいを始めた。

やがて歳月は飛ぶような速さで流れていった。

母が認知症を発症して我が家に引き取ることになり、十
年間の入院を繰り返しながら、最後は娘の顔も分別がつか
なくなつて、眠るように旅立って逝つた。

「ベスを引き取るぐらいじゃないじゃない。もつと心を開
いて相談してくれば、何とか道は開けたのに……あの人も
戦死したのと同じことだよ。アメ公に弄ばれて可哀そう
に」

涙ぐみながらベスの亡き骸をなでていた。

そうか、ベスが初めて我が家に来た時、母が腫れぼった
い目をしていたのは、泣いていたのか……。

あまりにも衝撃的な話に、言葉もなかった。

今の今まで、お姉さんはアメリカで幸せに暮らしている
とばかり思っていた。

二階の自分の部屋に駆け上がり号泣した。

お姉さんの直接の死の原因は、確かに彼の裏切りからな
のだろうが、幼い私が言い放つた毒矢がお姉さんをさらに
絶望のどん底に突き落としたのだろう……。

彼女が心から信じて、可愛がっていた子供が突然悪魔に
変身した時の、驚きと悲しみは、孤独に打ちひしがれた心
に鞭打つ行為だったのだ。

あの時、私がお姉さんに意地悪をしなければ、もしかして
お姉さんは祖母や母に助けを求めたのかも知れなかった
のに……。

私が意地悪をしたのに、お姉さんは、私がたった一度だ
けプレゼントした、萎れてもう形も崩れてしまっただろう
蓮華の冠をつけていた……。お姉さんごめんさい、ごめ

そして、夫も二年前に他界して、私は現在一人暮らしの
日々を送っている。

自己免疫症の病に掛かり、何種類の投薬で何とか自力で
生活を送っているが、年々少しずつ病は進んでいると主治
医に言われている。

そんな昨今、段々と眠っていた記憶が蘇り、半世紀以上
経つのに、あらためて、名前も知らない、顔も思い出せない、
い、だけど鮮烈に夢に現れた愛おしいお姉さんと向き合いた
いと思うこの頃だ。

最近、私は立て続けに奇妙な夢を見る。

最初は五分咲きの桜の木々を背景に、臨月に近い美しい
女性が笑いかけている。

次は満開の桜の下で、赤ん坊を抱いた同じ女性が微笑ん
でいる。

そして、その次は桜の舞い散る花吹雪の中で二、三歳の
可愛い金髪の男の子と手を繋いで寂しそうな笑顔で私を見

「文芸思潮」編集部員募集

有給

大卒以上／要編集経験・文章力
履歴書送付 編集部まで

bungeisc@
asiawave.co.jp
五十嵐まで



萩原紫香

はぎわら しこう

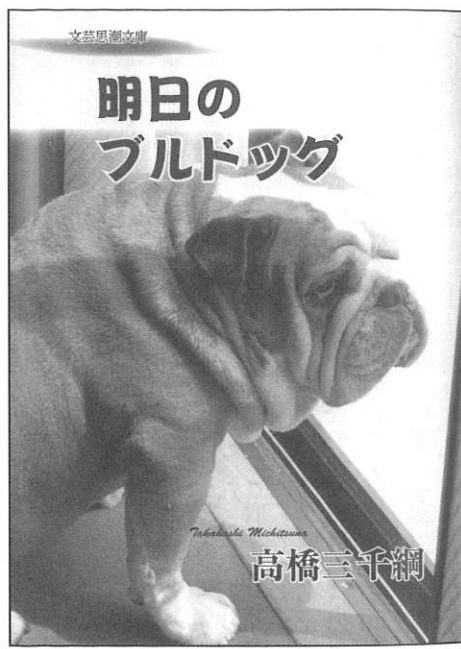
1946 東京生まれ
頌栄女子学院高等科卒
専業主婦
ブログに小説を書いていたがYahoo!のブログが廃止になり、昨年より千葉県
「楨の会」同人会所属



つめている。
それらの夢の中で、私は悔恨の涙で許しを乞い、嗚咽を漏らしている自分の声で目覚めるのだ。
ただただ懐かしく、切なく、傷を負わせてしまったその人に対して、やり場のない後悔に駆られているのだ。
遠い日の記憶が、その都度いつそう鮮やかに、子供の成長を私に見せるかのように夢の中に現れる……。
時空を越えて、私の意識はあの愛おしい時代にと呼び戻されるのだった。
この春、多分もうこれで最後になるだろうと思い、四ッ谷の両親や祖母の眠る菩提寺に墓参した。
帰りに、あれ以来足を向けることが出来なかった、懐かしい青山墓地に出向いた。
タクシーを降りると満開の桜並木が続いていたが、墓地の桜はどこかひっそりと儚げだった。
うる覚えに、土手に続く路地を辿った。
だが目的の土手はもうなかった。
綺麗に舗装された墓所の道を抜けて一メートル先辺りから、フェンスで遮られ、その下は崖になっていた。
都電が通っていた頃よりかなり道路が広がり、青山方面に車道が続いている。
私は途中の古木の桜の根元に、持参したお線香に火を灯

し、ペットボトルのお水を添えた。
お姉さん、やつと逢いに来られた……。手を合わせた私の脳裏に突然、古い幻燈を観るように、花霞の中でお姉さんと胎児がゆらゆらと揺れているシルエツトが、そしてそのそばでペスが悲痛な声で鳴いている光景が浮かび上がった。
突風が地面に積もっている桜の花びらを舞い上げさせ、花びらの渦の中から、遠くハナとペスのふざけ合う鳴き声が聞こえてくる。都電のちんちんと鳴るベルの音とともに、キヤッキヤツと笑う声に優しい笑い声が混ざっている。
お姉さん……。
私は痛切にあの頃に戻りたいと思った。
戻れたら、小さな腕でお姉さんを思い切り抱きしめたい。「お姉さん、死なないで、死んじゃ嫌だ、私はあなたが大好きなのだから」
ふと、頭を撫でられたような気がして、我に返った。花びらがひとひら涙で濡れた頬に張り付いている。
やるせない悲しみを抱えながら、老いた私は桜の古木の下に立ち尽くしていた。

〔楨〕45号より転載



高橋三千綱の傑作愛犬小説

タイのすべてがここに
特価 2000 円 (税込/送料共)
注文はアジア文化社まで

楨 千葉県

「楨」と房総の文学

房総文壇への新しい書き手の発掘をめざして千葉日報社が主催し、千葉県教育委員会・千葉県芸術文化団体協議会が後援して始められたのが「千葉文学賞」でしたが、入賞者たちの切磋琢磨する場がないことを危惧していた遠山あき先生は、千葉日報社創立十五周年記念の座談会の席で、「入賞者が文学を語り、互に励まし合って創作する場を持ちたい」と提案しました。

すると、これまでの千葉文学賞、児童文学賞入賞者二十七名が賛同して作られたのが文学同人「楨の会」です。昭和五十一年（一九七六）のこと、千葉県の県木が「楨」であることから、その名にちなんで命名しました。翌々年の昭和五十三年には創刊号「楨」1号を出版し、その後、同人誌「楨」を、年一回発行し続け、昨年末には『楨』45号を発刊しました。創刊以来、一度も欠かさず発行し続けたことが、この度、認められたものと思います。

最盛期には三十数名もいた同人も高齢化が進み、入院したり、鬼籍に入ったりして、年々、会員数が減ってきました。また、創設者の遠山あき先生、二代目代表の三好洋さんと会長経験者が一年を置かずして続けにお亡くなりにな

り、「楨の会」も存亡の危機にまわられました。そんなときに、最古参の松葉瀬昭さんが三代目の会長を引き受けてくださり、「千葉文学賞入賞」という枠を取り除いたり、入会金・会費を下げていたりして「楨の会」を房総の文学愛好者たちの身近な存在にさせていただきました。それで徐々に立ち直ってきました。

三年前から、その後を受けて私（乾浩）が会長となり、新メンバーを募るために「楨新人賞」を設けたり、合評会の講評一覧をパソコン・メールで互いにやり取りするシステムを作ったりしました。幸い、「楨新人賞」の方は秋山裕幸さんが、また、合評会講評一覧表の作成には研修担当の藤田新吾さんが引き受けてくれて、合評会がより活発化し、充実してきました。さらに、一昨年の「第一回楨新人賞」を受賞して入会した宮川泉さんはNHK「銀の雫」文



中央1代目会長遠山あき先生、左2代目会長三好洋さん、右4代目の乾浩

「楨新人賞」を設ける

楨



合評会での「楨」同人メンバー



学賞優秀賞を受賞した実力のある方で、また、「楨新人賞特別賞」を受賞して入会した夢酔藤山さんは房州日日新聞等地域紙の連載を持つなどプロ作家として活躍している人で、意欲と多才な能力を持つ同人が揃ってきて、日々、研鑽し、互に切磋琢磨している昨今です。

萩原紫香（幸子）さんは、昨年、われらの仲間（同人）に加わり、内に秘めていた才能が開花し、この度、その作品が認められて『文芸思潮』まほろば賞候補（優秀賞）となりました。

また、この吉報に、「楨の会」創設者の亡き遠山あき先生も同人の活躍と会の発展を冥界で慶んでいると思います。
「房総を代表する文学同人「楨の会」の設立趣意は、「各人各様それぞれの世界や理念をお互いに尊重し合いながら自分という人間を表現するために自由に書きたいことを書



左 3代目会長松葉瀬昭さんと 4代目会長乾浩

く」ことと「いま住んでいる千葉の歴史や地理、伝承や遺跡を探り、この地で暮らす喜びを人と地域の絆（縁）として表現すること」さらに、「生きてきた証を小説や随筆に表現することによって、個々の生涯を見つめ直し、新たな自分を発見することを目指して創作すること」を伝統としてきました。

内房線五井駅サンプラザ七階にて、月に一度（第二日曜日）の午後一時から五時まで、それぞれが創作した作品を持ち寄り、厳しい中にも和気藹々（あいあい）と合評会をやっていますので、小説や随筆、自分史を書いてみようかと思っている人は、是非とも、「楨の会」の門を叩いてください。

叩けよ、さらば、開かれん！——です。

萩原紫香さんの今回の榮譽を同人皆で分かち合い、一人一人のものの考え方や見方を互いに尊重しながら、個々の創造性を伸ばす。そして、各人各様、目差す目標や夢に向かって飛躍することを願って活動しているのが「楨の会」です。

（「楨の会」代表／乾浩）

『楨』の会 事務局

T290・0512

千葉県市原市鶴舞777

TEL 0436・88・3537

岸本（下尾） 静江

原作 河林満

渴いているのは、心でした。

生田斗真
門脇麦 磯村勇斗
山崎七海 柚穂 宮藤官九郎 池田成志
尾野真千子
原作「河林満「渇水」（角川文庫刊）
監督 高橋正弥 脚本 及川章太郎 音楽 向井秀徳
企画プロデュース 白石和彌
配給 KADOKAWA ©「渇水」製作委員会

渇水

主演 生田斗真 × 企画プロデュース 白石和彌 × 監督 高橋正弥 6.2 fri
先の見えない現代に問う、「心の解放」を描いた珠玉のヒューマンドラマ。

生田斗真

門脇麦 磯村勇斗

山崎七海 柚穂 / 宮藤官九郎 池田成志

尾野真千子

原作：河林満「渇水」（角川文庫刊）

監督：高橋正弥 脚本：及川章太郎 音楽：向井秀徳

企画プロデュース：白石和彌

配給：KADOKAWA

©「渇水」製作委員会

6/2 FRI
ROADSHOW

河林満「渇水」
ついに映画化
ロードショー上映
6月2日より